

506  
697

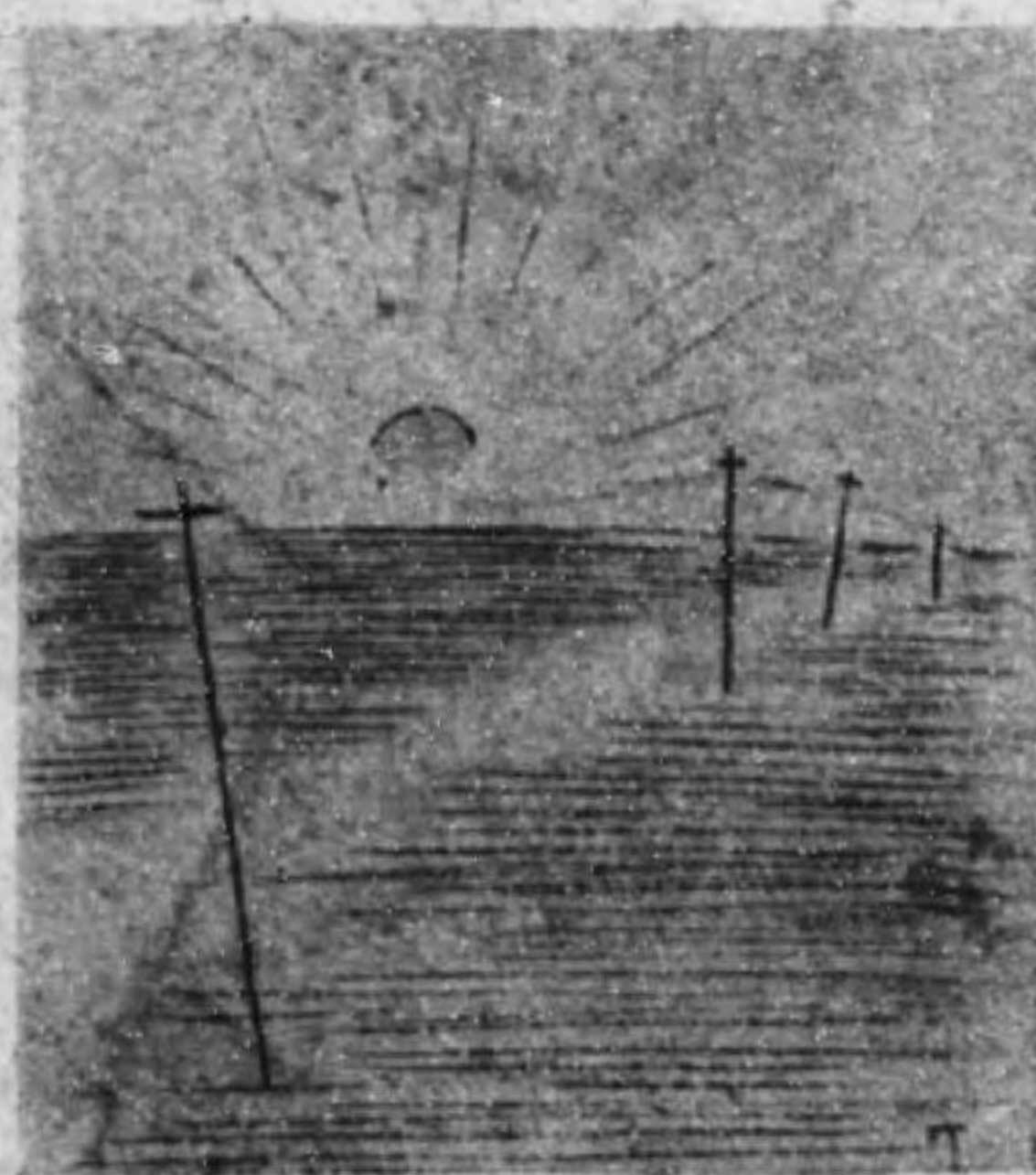
0<sup>m</sup> 1 2 3 4 5 6 7 8 9  $\frac{18}{70}$ <sup>m</sup> 1 2 3 4 5

始



506-691

文藝春秋  
 菊池寛著  
 1922



會星堂  
 13. 2. 4  
 求購

30  
 30  
 30

文藝春秋

菊池寛著

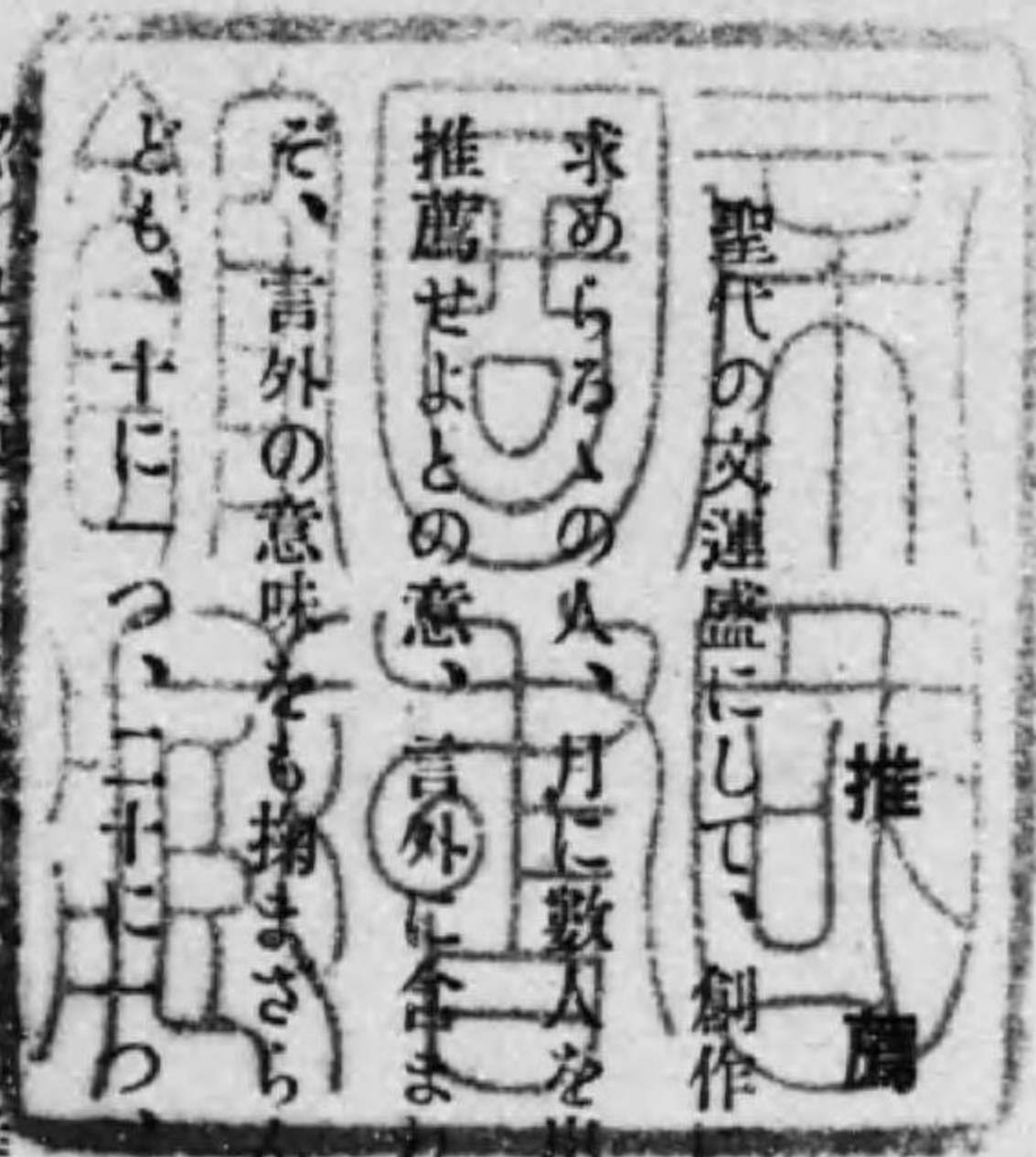
目次

文藝春秋(その一)	三
文藝春秋(その二)	一五
文藝春秋(その三)	二七
文藝春秋(その四)	三九
ある對話	五七
主流と傍流	七三
公開状を機縁として	八一
社会主義に就て	九五

小説家たらんとする青年に與ふ	101
文學志望者の讀むべき書物	111
暗黒時代	111
予の淺草觀	114
芥川のこと	113
將棋の話	119
おせつかい	117
將棋の師	117
齒痛	122
R	124

劇の筋及び境過	117
久米の戯曲集に序す	115
ダンセニイ戯曲集の序	115
「忠義」を觀て	111
溫泉場小景	117
后デルヴォルギラ	111

文  
藝  
春  
秋(その二)



難

聖代の文運盛にして、創作に志す人、天下に満ち、われらが手許までも、原稿の一見を求めらるゝの如し、月に數人を出でざることなし。一見して批評せよと云ふ以上、よければ推薦せよとの意、言外に含まれたり。文壇に出でんとして、多少の苦勞をなしたる我等何ぞ、言外の意味をも擲まざらんや。元より、蒐まるところの原稿愚作あり駄作あり、然れども、十に一二、二十に一二、文壇の水準に達したりと思はるゝ作品なきにしもあらず、然れども怨むは我等の推薦能力の微弱にして、無きに等しきを。

文壇の事情に通ぜざる人々は、我々の推薦能力を過大視す。孰くんぞ知らん、余の如き、過ぐる數年の文壇生活に於て、未だ一篇をも推薦し得たることなし。余が推薦したる作品

にして、掲載せられざること數ヶ月「若し某氏の作品を載せざれば、余も亦貴誌に執筆せず」と、最後通牒を送れども、何等の反應なし。余としては、一れ以上推薦の言葉はなし。たゞ、不徳にして人を動かすの力なきを悲しむのみ。

元より、雜誌當事者の事情をも知らざるに非ず。競争熾烈なる雜誌界に於て、必死の勝敗を試みつゝある彼等、何ぞ定評なき作家を容る、餘裕あらんやなど、推薦の容れられざる鬱憤を、自ら慰むるのみ。

余の如き推薦難を嘆じつゝある者に取つて、最も羨しく感ぜらるゝは、有島武郎氏の推薦能力の偉大なることなり。「雜誌には一切執筆せず」と宣言せし、従つて雜誌には、何等の恩をも施すことなき筈の有島氏の推薦にして、屢々成功し、年中雜誌に對する奉公に、忠實なる我等の推薦にして、失敗するは、我々の人徳の同氏に及ばざること遠きが爲ならんも、いさゝか羨望の感なくんば非ず。たゞ氏が、推薦にかゝる作品にして、未だ我等を首肯せしむるの佳作なきを恨みとするのみ。

然れども、推薦難を嘆ずるは、傑作に就いてには非ず。若し、我等の心を動かすが如き傑作ならんには、微力なる余と雖も、これを文壇に紹介し得るの自信はあり。傑作を書き得る無名の士は意を安んじて可なり。

### ペーソス

小島政二郎氏、宇野浩二氏の作品を評して、ペーソスなきカリカチュアなりと貶す。余は、宇野氏の作品が、カリカチュアなるや否やを知らず、また藝術的に上等なるや下等なるやを知らず、たゞ何はなくともペーソス文は、嚴存すと確信す。いな、宇野浩二氏の唯一の（これ語氣を強むるのみ）取柄はペーソスなりとまで、確信す。

小島氏の宇野氏に對する批評は、宇野氏の悪口を又聞したる小島氏の遺恨批評かは知らざれども、餘りに不親切無理解にして、宛も小島氏の文章を評して「當字だらけ誤字だらけ」なりと評するが如し。



## 文壇生活十年

頃日、芥川龍之介氏の渡支を送りて、送別會を催す。席上與謝野寛氏立つて送別の辭を述ぶ。辭中「芥川氏の十年の文壇生活に於て、」の語あり。芥川氏は文壇に出で、僅か五年に過ぎず（余の如きは僅に三年なり）、而も十年も十五年も文壇生活を爲したる中老の感じあり。文壇の變遷急激にして、昨日の新進は今日の中老なり、今日の中老は明日の大家ならば、幸なれども、豈落伍たらざることを期し得んや。文運推移のあはたゞしさ、空おそろしと云ふべし。

## 「不同調」文學

匿名を以て、文壇の彈正臺たる、獨り不同調の特權のみと思ひしに、頃者「新文學」に「文壇縱横」あり、時事に「火曜評論」あり、不同調の影響文壇を風靡す。たゞ怖る、文壇の張三李四、匿名の蔭にかくれて、無責任の横議を擅にせんことを。

## 次の祝賀會

秋聲、花袋二十五年祝賀會の次ぎは、恐らくは武郎、白鳥、荷風の二十五年祝賀會ならん。三氏は同庚なれば、文運の進歩に伴ひて、祝賀會の盛んなる、秋聲花袋祝賀會の比にあらざるべし。

第二の「現代選集」恐らくは世に出でん。借問す、第一の「現代選集」に於て、文壇の中堅を以て任せし作家諸子、七年の後第二の選集に於て、押しも押されぬ大家振を示す人、果して幾人ならん。因果は廻る小車の、雲の如き新進作家に依りて、「あゝ、あの人が」と、一言のもとにオミットさるゝことなくんば幸なり。われら、大に加餐せずんばあるべからず。

## 同人雜誌

同人雜誌の續出應接に暇なし。紙代印刷代の低下せしためなりと云ふは皮肉にして、作家凡庸主義の影響なりとなすは、余の自惚なり。然れども、天下亂れんとして、流賊四方に現はれ、文壇大に動かんとして、同人雜誌漸出すと解せんか。同人雜誌を流賊に比する、もとより諸子に禮を失す。然れども、諸子の裡、よく陳勝吳廣を生み、遂には天下取りの項羽、沛公を産まば文壇の幸なり。

## 「父 親」

「人間」派の存在漸く文壇に重し。諸子は元來、烏合の衆なり。(人間派諸公を貶價するに非ず、たゞその出身經歷の區々別々なるを云ふのみ)、國民文藝會を組織するや、貶譽の聲頗る轟し。

「人間」を發行するに及んでや、たゞその發行期日の漂々乎として、定まらざるを以て、鳴れり。「人間」誌上傑作の出づると云ふに非ず、名論の現はるゝにもあらず。而も、「人間」派の鼎をして漸く、重からしめたるもの、一に里見弴氏の名作「父親」に在り。「父親」の光は七光りと云ふべし。

## 「人間」合評

「人間」合評甚だよろし、殊に、A氏よく論じ、而も言説潑刺明快にして、溫健中正なり。たゞ恨むらくは合評の席上、諸子の酒を用ゐる形跡あることにして、酔の廻るに従ひ、機鋒益々鋭く、裁斷完膚なく、かひなでの作家の如き、忽ちにして、寸斷せられんとする概あり。白柄組の面々、三尺無反の一刀を腰にし、櫻花の下酒盃を手にして、行人の美醜を論ずるが如く、少しく物騒なり。

批評に種類多し。賣笑批評、仲間賞批評、文換批評、曰く何。曰く何。今又、「人間」合評のために、一杯機嫌批評の語を生むなくんば幸なり。

### 寡作多作

文壇往々、某々氏の寡作を讃し、某々氏の多作を貶す。然れども、寡作も多作も、その作家の経済的背景を伴へる場合、妄りに讃するに足らず、妄りに貶するは酷なり。家に恒産あり、晩年の不安なく、身後の憂ひなくんば、誰か多作して、濫作の譏りを招かんや。悠々自適、心熟してペンを手にし、夜に一枚、日に一枚、彫心鏤骨の筆を行る、人生の快事なればなり。誰れか自ら好んで、日に三十枚、夜に三十枚、メ切間際に、油汗を流さんや。

### 室生犀星氏のエロチシズム

頃日、偶々室生犀星氏の小説「鯉」を読む。篇中、川師佐助なるもの知人河原屋を訪問するの一條あり。屢々、おとなへども、晝日中なるに容易に返事せず。やゝありて、「はい、たゞいま」と、しどろに答へて、二分ばかりして、若い女房が前垂れをしめながら、慌て

ゝ、出づるを見れば、「胸さき開かれて白いたわゝな膚の地が見え、眞赤な顔が、じとじとに汗ばんで居た」と云ふ。余は茲を読んで久米正雄氏の所謂微笑を洩せり。女を描けば必ず姦淫を思はするものは室生氏なり。一篇の結構を見るに、此女房の淫あだなる姿態を描く何等の必要あるに非ず。ただ、作者の趣味に過ぎず。むしろ、室生氏がエロチシズムの弊と云ふべし。氏の作品に現はれたる男女關係は、ウエデキントのそのの如く、強き性慾のそれにも非ず、シユニツツレルのそのの如き、戀愛三昧にもあらずして一重に、いろの世界なり。感覺的チシズムエロの世界なり。氏の作品には、常に高等なる春本的香味の漂ふ所以か。

### 末派

鶏口となるとも、牛後となる勿れと。これ、獨り男子處世の要諦にあらず、文壇一部の諸子に呈すべき好個の訓言なり。潮先に集ふ小魚の如く、昨日は東今日は西、A氏の聲譽

上れば、競ふて讚美の聲を揃へ、アンチB氏の聲起れば、又競ふて非難の聲に合す。文壇西すれば、我東すべし。文壇上を指せば、我獨り地を指すべし。男子須らく天邪鬼たるべし。

文 藝 春 秋 (その二)

いゝ子

自敘傳小説の弊は、作家即ち主人公のいゝ子となるに在り。自己内心の醜惡さを、勇敢に告白するが如く裝ひ、しかも終局に於て、讀者の同情を一舉にして、取り返すは、自敘傳小説の常套手段なり。自己を鞭打つ如く見せて、しかもソツと力を抜き、他人を撫する如く見せて、しかも掌中私かに針を藏す。

人生小説のモデルとなる既に不幸なり。自敘傳小説中のモデルとなるに至つては、辯護人無くして法廷に立つが如し。作家は自己即主人公の行動に對しては、モリス・キム百方辯辭を並べ立て、作中他人物の行動に對しては、義理合にたゞ一片の、而かも得手勝手の辯辭を與へ置くに過ぎず。讀者の同情が、蕩然として主人公に向ふは、自明の理のみ。

自叙傳小説を書いて、いゝ子となる。これ現代作家の通弊なり。只わが細田民樹君あり。半自叙傳小説「冷酷と無情」を書いて、批評家の憎まれ子となる、以て文壇の異彩とするに足れり。

一六

### 好個の會合

本年二月、中戸川吉二・湘南に於て、島田清次郎に邂逅す。年少氣を貢ふの士、兩々相峙して下らず、一奇觀を呈せしと聞きけるが、今又「國本」所載葛西善藏作くる所「浮浪」を讀むに主人公なる小説家常陸の海岸に漂遊して、創作の筆進まず、他人の厄介となること數次、萬策盡きて、歸京の途次、汽車のA驛を過ぐるや、主人公思へらく、未見の人なれども、作家S氏のAに住めるあり。事情を語りて、宿屋の紹介を頼まんと。讀んで茲に至り、余は主人公が、S氏と如何なる會見をやなすと胸を躍らせしに、恨むべし、S氏の出で、東京に在らんとは。主人公と共に思はず嗟嘆の聲を洩せり。

### 文壇の珍品

洪水の上に坐す神エホバ、日月の上に坐すとかや、詩人高群逸枝君、余が劇中の狂人は屋上に坐し、島田清次郎君は、「地上」に大胡坐をかく。賀川豊彦君は、跳躍して死線を越え、徳富蘆花君夫妻は「日本から日本へ」渡ると云ふ。欣ずべし文壇の珍品乏しからざるを。余が知見の某氏、文壇の珍品を舉げて曰く「平田禿木の翻譯、永井荷風の隨筆、竹の屋主人の劇評」と、惜しむらくは、凡て時代に遅れたり。余が舉げたるもの、規模の雄大なるに遠く及ばず。

### 月評とシンク

シンクの「海へ騎り行く人々」は、近代劇中の名一幕物として、世界的定評あり。邦語に反譯せられたる既に數回に及べり。然るに、四月號某同人雜誌に、幾番目かの翻譯出づ

一七

るや、中村星湖氏讀賣紙上の月評に於て、賞讃せりと云ふ。シングの世界的定評、中村星湖氏の裏書に依りて、更に一段の重きを加へたりと云ふべし。  
思ふ、沙翁、ゲーテ、トルストイ、ストリンドベルヒ等を、品隔する勇敢なる月評の出づること近きにあらん。

### 誤譯指摘

誤譯公行の世なり。翻譯の玉石同架、現在の如く甚しきは非るべし。年少氣銳の士、創作、批評に憂身を寢さんより、何ぞ先づ誤譯指摘の快を貪らざる。創作の出来不出来、批評の正鵠不正鵠は、水掛論なり。誤譯指摘の勝負は觀面、鬱勃の氣を遣る好個の排け口ならずや。

### Reading of Life

余は、新進の作家に、技巧の完璧を求めず。取材の新奇を求めず、たゞ求むる所は、新しい reading of life の持ち合せあるや、否やに在り。

### 淀君十種

中村歌右衛門知名の作者を招いて、淀君を主人公とする脚本十種の創作を懇請せりと云ふ。淀君ばかりに扮して何かせん。地下の淀君恐らくは苦笑すべし。門地と、先天の品格とにより劇壇の榮位を擅にせし老優が、晩年の聲價を維持せんとする苦衷のほど、人をして、そゞろにあはれを、催さしむ。

### 隠れたる批評家

現文壇の創作批評家中、余は隠れたる千葉龜雄氏あるを知れり。氏の「時事」に在るや、「時事」の六號評光れり。氏の「讀賣」に轉するや、「讀賣」の六號評振ふ。駈け出しの批評

家が、「あれも讀まず、これも讀まず」の遁辭を振翳すに比して、氏の如く月々の創作論文雜筆を、悉く讀破し盡す人、内務省の圖書檢閲係を除いて、又他に人あらざるべし。

如何なる作家に就いても成心を懐かざれば、その美點を認むるに吝ならず。文壇に何等の利害を持たざれば、媚びや御座なりを云はず。匿名の六號評に匿れて、文壇の進歩肅清に努むること年在り。氏の如きは、洵に文藝を愛する奇特の人と云ふべし。

### 批評獨立せよ

未だ月評の集められて一冊の本となりしを、知らず。

偶々買物を包みたる古新聞の文藝欄に、錚々たる批評家の名月評を再讀する機會を得るが如きは、悲しむべし。

現在の月評は、批評せられたる作家、若しくは作品の興味に依つて（この所に圈點を附けたし）僅かに、その月限りの興味を惹きつゝあるに如かず。シヨオの劇評が二三十年前

の興行を批評せるに拘はらず、而も尙吾人益稗をすると何等の相違ぞ。

讀んで卓見と智識と、機智の火花と、評家の人格とに觸れ後るが如き批評を待つこと切なり。語を換へて云へば、批評の對象を離れて獨歩し得る月評を待つこと切なり。

批評したる作品の悉く亡びて、批評のみ永く傳はるが如き名批評の願くは、早く世に出でんことを。

### 「地上」評

新潮五月號不同調を讀むに、○印不同調子曰く、「地上」が幾萬の讀者を得つゝあるは、正に一個の事實なりと。宜なるかな言や、余ははしなくも、カーライルが、英雄崇拜論中モハメッドに與へたる評語を想起せり。「モハメッドを詐欺漢と罵るものは罵れよ、イカサマ師と思ふものは思へよ、しかも古往今來幾億幾千の生靈が、モハメッドに依りて安心立命したるを如何にせん」と。移して以て、地上の作者島田清次郎君に呈すべし。



余は、「地上」の流行に就て、兼てより説あり。思へらく、現文壇の作風、餘りに理智に走しり、凡ての感傷味を賤しめ、繊細なる生活の岐路を描きて、大道を忘れ、野暮な大聲を發せずイキな咽喉を聞かさんことを努む。格調を守つて、羽目をはづさず。何等壯快なる調子外れなく、雄大なるロマンスなし。押川春浪の冒險小説を卒業し、蘆花の「不如歸」「思出の記」に嫌焉たる年少の文學青年が、擧つて王の王なる大河平一郎を讚美するまた、その故ありと云ふべきか。尙考ふべし。

### 江 口 渙

現代の英雄は社會主義者なり。江口渙の萬年筆を捨て、我軒を事とす。又男兒の快事ならずとせず。然れども、警察と戦ひ警視廳に拘束せらるゝが如きは、外にその人あるべし。何ぞ江口渙を待たんや。「人間」台評に依れば、君は純然たる小説家なりと云ふ。何ぞ社會主義的大小説を書いて、民衆の大義名分を明にし、來るべき大變事に對して、新しき

頼山陽たらしむる。同盟大會の會場、演壇に先登するよりは、まさること萬々ならん。

文  
藝  
春  
秋（その三）

### 歴史は繰り返すか

つひ此間、新著月刊の創刊號（明治三十年四月發行）を見るとこんなことを書いてあつた。

#### 社會小説論

今の文壇に社會小説を談ずるもの五派あり、貧民は勞働社會の爲に氣を吐けと云ふも是れ一、在來の作家が見落とせる下層社會の真相を主題とせよと云ふものはれ二、從來の戀愛に偏せる小説に對し、廣く社會の全體すなはち政治宗教其他あらゆる部に材を取れと云ふものはれ三、在來の心理小説寫實小説の個人を主とせるに對し、社會を主とし外界の現象を主とせよといふものはれ四、一代の風潮を指導し社會の豫言者たるの任務

を盡くせよといふものは五、「早稲田文學」所報」と。しばらく是れを事實とせんか、我が文壇は一社會小説の名を取りて、殆ど多形變化の怪物視せんとするなり。嗚呼社會小説、汝何の業因ありてか斯かる世に生れ來て、生ひ先き長き一生を他が翻弄に委かせんとはするぞ。

之で見ると丁度今から、二十三四年前に、やつぱり現在と同様、社會小説要求の叫びがあつたらしい。所謂「早稲田文學」所報の社會小説の具體的性質も仲々要を得、簡を得て居る。現在社會小説を要求する論者にも、これほど端的に社會小説の内容を明示したものはないやうである。現在社會小説を主張する人に訊いて見ても、たゞもう少し新しい言葉位を加へる丈で、殆ど一步も出ないだらうと思ふ。が、さう云ふ人達は云ふだらう。「いや主張する精神が違つて居る。民衆的自覺と、時代的精神とから、主張して居るのだと。」恐らくさうだらう、精神でも違つて居なければ、明治三十年の文壇を大正九年に繰り返した

ことに過ぎなくなるから。

が、新潮月刊の記者（恐らく島村抱月氏か）此の社會小説論を、駁してある議論も、仲々簡にして要を得て居る。所々抜き書して見ると、

「宗教も社會の一現象なり、はた貧民問題も勞働問題も等しく社會現象の一に外ならず、此等社會現象の一なりと云ふの故を以て、之れを材とする小説は社會小説なりと云ふか、論者が動々もすれば之に對舉せんとする戀愛も、等しく社會上の一現象にあらずや、軍記物も然り、俠客譚も然り、描寫に深淺の差こそあれ、古來の小説いづれか一として社會小説にあらずらんや。

然れども吾人は此種の説に於て、言辭の表以外一道の眞理を認めざるに非ず、社會的と云ふは人事的と云ふが如き廣漠の意義にあらずして、人事相依りて生ずる一種の約束、すなはち公的といふに中心を置くとなし、之に對して戀愛は私的なりと云ふ或は當たることあるべし、所謂公憤義憤と云ふが如きものに葛藤の根柢を托する。即ちこれなり。

現社會の公憤義憤に葛藤の根を發するもの例へば、貧民問題労働者問題の如きに材を探るを社會的と云ふ此の如く解する時は、社會小説と云ふものが必ずしも意味なきことにはあらず。

使つて居る言葉は、古いけれどもちやんと、社會小説の定義を下して居ると思ふ。更に論じて云はく、

試みに此の標準を探つて、前掲五様の見解に比擬せんか第一解、貧民又は労働社會の爲に氣焰を吐くと云ふ中には、二様の意義あり、その一は單に貧民又は労働社會に材を探るの謂なり。是を材とするものを社會小説といふ不可なるを見ず。第一解の二に至りては、一步して明に審美世界より逸せんとす、すなはち此の恰好なる社會詩材の上に特に、貧民労働者の爲に、するを寫せよと云ふなり。此に至りては既に詩を方便として、別の實際目的を成せんとするもの、小説中に主張あり傾向あるは、其の偶然必然の結果としては或は可ならんも、目的<sup>エンド</sup>としては今日普通の説より見て、邪徑に入れるものなり。

藝術の手段化、傾向化を排せんとする自分の主張なども、此の明治三十年の新著月刊氏の説より、一步も出て居ない。さう云ふ意味で、自分なども時代遅れだと云はれても一言もない。新著月刊氏は更に論じて曰く、

而も世には、往々此別を知りつゝ亡みして、名を憂世概時に釣らんとするものあり。吾人をして敢て云はしめば、人は寧ろたゞその職に専なれ、左顧右盼して何するものぞ。……吾人の文學に對する、たゞ直往あるのみ、精進あるのみ、利弊の計較に急に於て、古人の所謂行ふに成つて思ふに敗るゝは、吾人の與せざる所なり。此の意に於て、吾人は飽くまでも、文學の獨立を保持せんとす、方便の詩を作らんとする時は、宜しく文壇を去つて可なり。

仲々皮肉で痛快で、言葉は古いが、肯綮に當つて居る。

が、それは兎に角現代の文壇で問題になつて居る社會小説の主張と反駁とが、殆ど同じ

内容を以て、明治三十年に行はれて居たかと思ふと、世の中は妙なものだと思ふ。歴史は繰り返すと云ふのは、こんな事を云ふのかも知れない。が、論者は云ふだらう。主張する精神に於て、雲泥の違があると。恐らくさうだらう、精神にでも雲泥の違がなければ、故人にも耻かしい。

### 社會小説

日本に於てこそ、社會主義の小説は、珍らしいけれども英國の文壇では社會小説などは、幾何でもある。日本で今更らしく、社會小説を要求し、さうした主張をする人が、時勢に遅れない文學者らしい顔をするのは可笑しい。苟に英國の社會小説家の名前を擧げて置かう。否英國の自然主義の作家は大抵社會主義者で社會小説をかいて居る。と云つても過言でない位である。

ア・サア・モリソンの「貧乏街の話」ソマアセット・モウハムの「ラムベースのリザ」

ハ之は工女の裏面をかいた小説で、勞働小説である。

ギツシングの「新グラップストリート」

リチャード・ソイトニングの「ジョンストリート五番戸」

(之は貴族の生活と貧民の生活を對照的に書いたもので、立派な社會主義小説である。)

フラング・ハリスの「老コクリン及び他の話」

之は皆、社會主義の小説で發賣禁止になつたものである。その外、バアナド・シヨオが・フ・イビアン社會主義の首領であることは誰でも知つて居る。その他、カンニングハムグレハム、グラントアレン、ロバートブラッチフォード(社會主義を通俗的に傳へる小説家で、此の人の「樂しき英國」は十萬部を賣つた)エッチ・ジイ・ウエルス、アーノルド・ベネット・シドニイウ・ツプその他幾何でも居る。之等の作家は十九世紀の終に出て、社會主義を信條とし所謂社會小説をかいた人達である。日本の文壇で要求して居るやうな作品は、英國では

三六  
十九世紀の末葉に出て居る。日本の文壇の先覺者を以て任ずる文藝の社會化主張論者なども、英國の文壇から見ると、二十年は遅れて居る譯である。否、意を強うして可なり、新著月刊で見ると、日本でも英國と同時代に社會小説要求の聲は、あつたのだから。

### 愛蘭土人と日本人

愛蘭土問題が、段々難つかしくなつて來て居る。シン・フェイン黨の活動が、段々暴動化して來て居る。自分は、シン・フェイン黨に満腔の同情を表するものである。一體英國が、丸切り人種を異にし宗教を異にし、傳統を異にする愛蘭土を統治せうと云ふのが無理である。

殊に、あれほど立派な秀れた文藝を有する愛蘭土を、異民族の統治の下に置かうと云ふのが無理である。セルト人種たる愛蘭土人は性情に於て、氣質に於て、生活に於て、全く英國人と異つて居る。

自分は、外國の中では一番愛蘭土が好きである、英國なり佛蘭西なり露西亞なりの文藝を讀んでも、何うしても、その中の生活なり人物なりに親しめない。たゞ、愛蘭土の戯曲を讀むと、その中の百姓の生活などは、ピッタリと我々に觸れて來る。ある點では、日本人そつくりである。愛蘭土の母親などの、無自覺にして、小供と夫との爲を考へて自分のことは少しも考へないことに於て、日本の母親そつくりである。英國の母親のやうな、自我の強い理智に富んだ女ではない。その他、結婚制度と云ひ、家庭の様子と云ひ、日本と酷似して居る。地方の文明の程度が、日本と同じ位な處もあるだらうが、しかし本質的な所でも可なり似て居る。感情に激し易く、その癖執着がなく、喧嘩早く、迷信深いところなど、歐洲の中では、一番日本人に似て居る。自然の美を感じ、物のあはれを知る點に於ても、日本人に似て居る。ラフカチオ・ハーンがあんなに日本を愛し日本を理解したのも、彼が愛蘭土人の血を半分持つて居た爲ではないだらうか。

日本の古今の文學を通じて、自分の尊敬する作家が、たゞ一人居る。それは西鶴である。人生を本當に見た作家として西鶴ほど偉大な作家はないと思ふ。近松などは遙に劣ると思ふ。本當に外國語に翻譯せられたならば、世界的文豪として優に古典の中に居る人だと思ふ。

文藝と活動寫眞

メイテルリンクは、ゴールドウキン社のために、年一回の映畫劇を提供する契約をしたと云ふ。西班牙のゾラと呼ぶる、ブラスコ・イバネスは、連續物を名女優なるパール・ホワイトのために、映畫劇を書くとのことである。活動寫眞の價值が段々認められて來るのは、欣ばしいことである。活動寫眞を不當に輕蔑して、映畫の人とならないのは、日本の歌舞伎俳優に違ない。その癖、彼等の給金なんか、フエイアバンクスやエスハートの二十分の一にも、達して居ないだらう。

文 藝 春 秋 (その四)



### シヨオとトルストイ

バアナアド・シヨオ、その作「人と超人」をトルストイに送りて批評を求む。トルストイ曰く、

「人類の運命乃至現代社會に滿ちたる墮落及び罪惡の原因などの問題に就いては、戯れに論ずべきには非ずと存す」と。

シヨオ「馬盗人」を作りしとき、更に一書を添へてトルストイに送る。文に曰く。

「貴下は、余の前作に對して、文體不眞面目にして、最も嚴肅なるべき瞬間に、觀客をして笑はしむと云はれ候が、何故然ありては不可なるにや。笑と諧謔とが何故禁ぜらるるにや。若し、人生其物が神の戯れの一つなりせば如何。若し然る場合には、惡き戯れ

を良き戯れとなす爲に、貴下は現在と同様努力し給はざるか」と。  
トルストイ更に答へて曰く、

「バアナアド・シヨオよ。善悪に就いての貴下の考察に就いては、貴作「人と超人」に付き  
て申したることを、たゞ繰り返すのみ。即ち、神若しくは善悪などの問題は、輕々に論  
ずべく餘りに重大なりと云ふ外言葉なし。従つて—卒直に申せば—貴下の最後の言葉は  
余の心を傷くること甚しかりし」と。

シヨオとトルストイの面目躍如たりと云ふべしである。

たゞトルストイの崇拜者多き日本にては、シヨオの言葉に、トルストイ同様眉をひそむ  
る人多からんと思ふ。然し、シヨオの戯曲の皮肉諧謔の中に潜める人類に對する涙を知る  
ものは、必ずしもシヨオの態度を不眞面目とは思はないだらうと思ふ。

歐洲大戰五年の間、帝國主義とジンゴイズムとの英國に在つて、周圍の迫害侮辱嘲笑  
と戦ひつゝ、正を持し、眞理を説いて、たゞろがなかつた勇猛な態度は、鐵腸の士に非ず

んば爲し能はざる所である。ハウプトマン、ロチ、ダンヌンチオなどの人々が、國論に従  
ひ愛國心に目眩き、自國辯護の言説を爲した中に、正論を持した文豪は、たゞシヨオとロ  
マン・ローランとがある丈である。

トルストイの偉大は、言議の上にあるが、日本の文學者にも、態度が眞面目でなければ、  
眞面目なことは考へられないやうに思つて居る人がある。人類とか愛とか正義とか、さう  
云ふ大旗を翳して居る者だけが、本當に眞面目なことを考へて居るやうに思つて居る人がある。  
そんな考へ方は、大上段でなければ人は斬れないと思つて居るのと同じである。冗  
談や輕口を交へても、眞面目なことは云へるのである。人類と愛など云ふことは、口に  
出さないでも考へることは、誰にだつても出来るのである。世の中には、トルストイの如  
く人生を考へて居る人もあれば、シヨオの如く人生に對して居る人もあるのである。不眞  
面目だからと云つて、肝腎なことを考へて居らぬのとは云へないのである。眞面目な顔だ  
けして居て、頭の中は案外空虚な人もあり得るのである。

### 株主監督制度

劇の演出に於て、所謂舞臺監督なるものを認め始めたのは、近代劇勃興以來のことである。外國では、ラインハルト、バアカア、日本では小山内薫氏などを嚆矢として居る。舞臺監督を認めない前は、舞臺の指揮狂言の選定は、所謂首俳優がやつた。之を首俳優監督<sup>スタッフアクター</sup>制<sup>システム</sup>度と云ふのである。アーヴキングの時代は、之であつたのだ。所が、日本には、馬鹿に新しい監督制度が起りかけて居る。それは、劇場の有力な株主が、狂言の選定、舞臺装置、俳優の役割などに干渉指揮する制度である。之を株主監督<sup>ストックホルグ・スマネーゼンシステム</sup>制度とでも云へばいゝかも知れない。日本の新しい演劇は、かう云ふ所から、起るのだらう。

### A happy ending

これを云ふことは、少し耻かしいことであるが、自分などは芝居を見るとき、それが

happy ending である方が、何となく物足りるやうな気がする。これは、人間の原始的な幼稚な要求の一つではないかと思ふのである。

が、幸福なる大團圓は、世の中は幸福な場所であると云ふ安價な樂天主義の名残りである。即ち舞臺の上の悲劇は、一時の變態であつて、再び幸福な生活の中に、流れ込むものと信じた頃の名残りである、何も作者が、確信を以て、幸福に了らせて居るのではないのである。今でも、活動寫真とか、通俗小説などは、「幕開中は行動自由なれども、最後の幕切の節は、必ず一組の男女をして結婚せしむべし」と、布告を出してあるやうである。英國の夭折した戯曲家ハンキンは、劇に於ける凡てのロマンチック、エンディングスを、虚偽なりとして曰く、

「哲學的に考へると、死でさへ何の結末をも付けない。小事件の結末にもならない。我々は凡てを生き延びる。」と云つて居る。死さへ然り。況んや結婚の如きは、「新しき多くのいきさつ」の始まりであると云つて居る。彼の戯曲「カシルの婚約」の中のヴェルレカア

は、ミス マアジャリイなるものと婚約するが、女が道德堅固で、他愛的であるのに、自分が快樂主義であるのを悟り「結婚はロマンチックにやつたりするものではない。餘り永く續き過ぎる」と云つて破約するのである。ハンキンは、これこそ眞の「めでたしく」であると言つて居る。もし、之を結婚さしたら、直ぐ離婚訴訟の場を書かねばならぬと云つて居る。グランヴェル・バアカアも、「マドラス ハウス」の結末のト書きに曰く。

「と彼女は、言葉を途中で切つた。實際此の問題には結末はないのだから」  
そして、彼の「マドラス ハウス」は、男女の會話の途中で切れて居る。

### バアカアの會話

バアカアは、其の思想こそシヨオに感化れ、思想劇的などころがあるが、その手法に至つては、極端に自然主義である。奔放自在である。「マドラス ハウス」の如き、何の統一

もない。たゞ「マドラス ハウス」と云ふ、三越のやうな商店を賣らうとして居るのと、

その店員の一人が、姪んで居ると云ふ丈である。「夜の宿」の如き、統一はないやうであるが、空氣の統一がある。「マドラス ハウス」に至つては、人物と會話との大渦卷である。

日本の現在の戯曲は、實に型にはいり過ぎて居る。芝居上の慣習を攻撃しながら、その辯自分達の戯曲は、直ぐ現在の劇場に體よく收まりさうな、キチンと片づき過ぎたものばかりである。新興劇壇の大勢に應じ得るやうな、もつと大膽なアムピシヤスな奔放自在な芝居があつてもよさうに思はれるのである。バアカアなどの奔放な作劇態度に比べて、餘りに妥協に富み過ぎて居ると思ふ。

殊に、會話などゝ來ては、丸切り外出用のこしらへものばかりである。どの人物もどの人物も、何遍も云ひ馴れたやうなことを、スラ／＼と誦して居るやうに云ふのである。舞臺以外では、世の中の何處にも、通用しないやうな會話ばかりをして居るのである。人間は、もつと無駄な、そのくせすばしこい、抑揚自在な、その辯時々はだらける、も

つと突込んだ、然し時々はボンヤリした會話をするのである。芝居の人物のやうに、一つの話題を捕へると、馬車馬のやうに、そればかりを喋べつて居ないのである。

さうした自然に近い會話の例として、バアカアの會話を引いて見よう。「アン・リキトの結婚」の第一幕劈頭の會話である。

夜明けのまだ暗い庭で、ロード・ジョンと云ふ男が、アン・リキトに、初て突然キスした後の會話である。

Lord John. I apologise.

Ann. Why is it so dark?

Lord John. Can you hear what I'm saying?

Ann. Yes.

Lord John. I apologise for having kissed you.....almost unintentionally.

Ann. Shall we sit for a minute? There are several seats to sit on somewhere.

Lord John. This is a very dank garden.

(There is a slight pause.)

實に、ライフライクな本當の會話であると思ふ。虚偽フオルバフエネチヨシスの問と虚偽フオルバフエネチヨシスの答などは、微塵もない。日本の下らない戯曲家であれば、こんな時の會話はサツカリンのやうに甘たらい、鼻持のならないものだらう。

### 國家の藝術家尊重

自分は、三月の「新潮」で、佛蘭西が國民的に藝術家を尊重し大通、廣場に「ブラースバルザック」「アヴェニユ ヴキクトル・ユーゴー」などあることを引き合に出したが、聞けば伊太利には「レオナアド・ダ・ヴキンチ」なる軍艦ある由、「ドレッドノウト」とか「インドミタブル」とか、「ライオン」「タイガア」など、子供だましのいかつい名前しか付けない英國や、山の名や國の名などしか付けない日本に比して、伊太利が其藝術國なるを知

るべきである。尤も「雪舟」艦など云ふ軍艦は困まるが、光琳丸など云ふ御用船位あつてもいい。また「歌麿」「豊國」など云ふ水雷艇などはあつてもいいと思ふ。尤も「レオナード・ダ・ヴキンチ」號は、歐洲大戰中沈没した。

### 道徳的姦通

近松の戯曲に、不倫の關係を扱ひたるもの、自分の知る限りでは、三つである。「戀八卦柱曆」「鎗の權三重帷巾」「堀川波の鼓」である。どれもこれも、姦婦の方へは、絶大の云ひ譯を與へて居る。おさるにしろ、おさんにしろ、皆貞淑な女房である。その姦通に至る徑路は、何等道徳的の責任はない。おさんの如きは、夫の亂業を諫めるために誤ちを犯すのである。おさるの如きも、我子大事夫大事の爲に、つひ犯す誤ちである。「波の鼓」の女主人公だけは、やゝ人間的な動機からの失策であるが、然し非常に同情すべき理由があるやうである。近松の理想主義が、眞の人間性を曲けて居ること甚しいと云つてもいいと思ふ。

ふ。其處へゆくと、西鶴のおさん茂右衛門の姦通の動機は、人間的であり、かつは自然である。おさんが、お玉の床に寝るのも、ほんの悪戯からである。が、「負ふた子に叩かせて見る惚れた人」で、悪戯をする以上、おさんは道心堅固な女ではないのである。従つて、おさんと云ふ女性が、可なり自然に人間的に思はれる。近松は、かうした所は、道徳的に人生を捻ぢ曲けて居るが心中の描寫の如きに至つては、餘りにリアルで、かつ残酷であり過ぎる。「卯月の紅葉」の心中の場を引いて見よう。

「夫の手を取り、わが咽喉に、押し當つれば思ひ切り「南無阿彌陀佛」と笛のくさり、髮剃の刃も折れよと、一剃りは剃りしが、若き者の悲しさは、とどめの急所を知らずして、」と妻を殺し損じて、自分も殺し損ひ、「髮剃の刃は鋸と折れ碎け、皮肉ばかり切れけるを、力を入れて突きけれども、貫りつべうはなかりけり」と。狼狽して、傍に置きし脇差を取らんとすれば、鐔は重く手は弱り、はづんではねる勢に、中身が抜けて、傍の池中に落ちる。男は之を拾はんとして、汀に至らんとすれば血に足滑べりて池中に轉落す。瀕死

の妻も「今を最後の眼にも夫を思ふお龜が心、引き揚げんとや思ひけん、はふく岸によ  
ると見えしが、眩む眼に氣も亂れ、同じく池にどうと落ち互に助け引き上げんと、抱き上  
ぐればどうと臥し、搔き上げればかつばと伏し、心ばかりを力にて、「喃與兵衛様く」「お  
龜く」と呼び交はず。絶えく切る、息の下。此の世からなる地獄かや」と。凄慘嚴格  
なるリアリズムと云ふべきである。

### 「演劇私議」非難

自分が「人間」二月號に發表したる「演劇私議」に關して、二三の非難を聽く。その最  
たるものは、余に無名のハガキを寄せたる某無名氏ならん。曰く、

「大馬鹿野郎の鼻糞野郎の凸凹野郎。貴様の此の頃の傍若無人に呆きれるわい。貴様に  
は日本の歌舞伎が分るものか馬鹿。貴様は新しい試みと云ふ赤い尻の女さへ見て居りや  
いゝんだ。貴様の創作見る位なら神田伯山の方が、數等ました。圖にのほると、ひどい

ぞ。月の無い晩もあるからな。馬鹿の垢だらけ。色狂人で、山齒龜で、色魔野郎」と。  
蓋し「新演藝」所載の何某みの吉氏の「演劇私議」冷笑と相待つて反駁の好一對と云ふ  
べし。但し此の方が、いくら秀れて居る。「馬鹿の垢だらけ」丈には文句がない。

### 出方式人間

鈴木泉三郎氏余の「恩讐の彼方に」を批評して、歌舞伎の殿堂に泥足で踏み入つた如き  
戯曲なりと云ふ。之純然たる批評に非ずして、余が氏の戯曲「幸福」を悪評したる報復に  
過ぎざること明かなれども、今暫らく批評として論ぜん、しんこ細工の如き芝居、人形の  
如く人間的要素なき人物の張梁する芝居、虚偽とイカサマとケレンの外何物もなき歌舞伎  
の殿堂に、「恩讐の彼方に」の如き戯曲が、演ぜらるゝは鈴木氏の如き人間に取りては、宛  
も見も知らぬ他人が泥足にて踏み入りたるが如き感あるは、尤もと云ふべし。今後も余は、  
虚偽と頽廢と御座なりの外何物もなき歌舞伎の殿堂を、眞實と力との泥足で、散々踏み躪

つて見たいと思ふ。左團次が、洋行から歸つて、明治座で改革的興行を爲さんとするや、第一に反抗の聲を揚げたのは、舊制度に衣食して居る出方共であつた。が、眞に革進を欲する者は、かうした出方式人間の蠢動などは、泥足で踏み躪ることが一番必要だと思ふ。徹底自然主義の戯曲家たるハウプトマンを以て、自任する鈴木泉三郎氏などは、余のかうした大意圖に、第一番に賛成して呉れるだらうと思ふ。

### 忠臣蔵變嫉氣論

自分の劇論を、「忠臣蔵變嫉氣論」に比較する人があると聞いたので、此の頃「忠臣蔵變嫉氣論」を読み直して見た。社會上の慣習、思想上の殻が疊積して居る時代に在つて、忠臣蔵の人物を、あれほど批判的に本質的に、人間主義の上から批判して居る三馬は、偉いと思つた。あれを變嫉氣論視して、濟まして居る徳川時代の學者や、作家や、劇評家や芝居者の方が、よつほどあはれに思はれた。たゞ一番いけないことは、三馬自身自分の議論を變嫉氣論だと思つて居るらしいことだ。

### 自己——特別な場合

飛行機に乗る將校は、幾何同僚や先輩が落ちてても、自分丈は大丈夫だと思つて居るさうだ。勸業債券を買ふ者は、他の千人萬人は外づれても、自分丈は最高割増金が取れると思ひ、作家の所へ原稿を送る文學青年は、どんなに忙しくても、自分の丈は見て呉れるだらうと思ひ、世界亡滅の日が來ても何だか自分丈は、生き延びられさうな氣がするなど、各個人に取つて、自己は常に特別な場合である。而も客觀すれば悉く、一般の場合となるこそ、浮世なれとでも云はうか。但し特別な場合とは云へ二通あり、みんな流感になつても俺丈は、大丈夫なりと思ふは強氣の特別な場合にして、何だか俺丈は、特にかゝりさうだと思ふは、弱氣の特別な場合である。たゞし強弱の差こそあれ、等しく特別な場合である。



あ  
る  
對  
話

○  
客。文壇意識があり過ぎると云つて非難されて居たのは、貴君ぢやありませんか。

主。さうかも知れないね。然し、僕は何よりも嫌なことは、ヒポクラシカル嫌善者的と云ふことだ。文壇生活に依つて、衣食を得、名を成して居る以上、文壇意識があるのは止むを得ないぢやないか。文壇意識などは微塵もないやうな藝術家振を示すことなどは、僕には出来ないね。一體日本の文壇は、新しがつてる癖に、藝術家の態度などに就いては、イヤにコンヴェンショナルで、名利の上に超越して、清貧に安んじ、藝術家振つて居ることが、今尙貴まれる。さう云ふ態度も、一の姿態ポゼとして、面白いとは思ふがね。

客。姿態と云ふ意味は。

主。イブセンの「鴨」か、何かの臺辭の中に、「姿態を探らぬ人はない」と云ふ言葉があるが、作家だつて、それ／＼姿態があるよ。例へば、久米正雄の無抵抗主義、里見弴の名人主義、芥川龍之介の超越主義、宇野浩二の不得要領主義、加能作次郎の苦勞人主義、葛西善藏の清貧主義、谷崎潤一郎の悪魔主義。

客。それが、姿態であつて、本體ぢやないと云ふのですか。

主。いや、姿態と云ふことを、さう云ふ意味に取つて呉れては困まるよ。姿態と云ふことは、擬態と云ふことぢやないよ。姿態には、七八分まで、作者の本體があるのだよ。たゞ、残りの二三分丈が、擬態だと云ふ意味だよ。

客。文壇で一番姿態の甚しい人は誰でせうか。

主。鼻持ちのならない人が、二三あるが、よさうよ。憎まれるから。尤もその人達の名前を挙げると、僕の云つて居る姿態と云ふ意味が、ハッキリするのだが。

客。どうです、近頃の文壇は、めつきり沈滞して居るぢやありませんか。傑作なんか少しも出ないぢやありませんか。

主。大中作家漸く疲れ、而も新進作家尙興らずと云ふ處だ。それに、現在の文壇で一番細かいことは、文壇に何等の主義も何等の感激も、何等の理想もないことだ。何等の合言葉も、何等の標語もないことだ。勤王攘夷とか、民族自決とか、人心を咬るに足る感激が欲しいね。二三年來の文壇には、掲ぐべき何等の旗旗もないのだからね。

客。民衆文藝、勞働小説と云つたやうな席旗が揚つたぢやないですか。

主。旗持が彌次だもの、作家らしい作家は隨いて行かれないぢやないか。

客。何も旗旗なんか、必要がないぢやありませんか。作家が、「いゝ小説」さへ書けばいいんですから。

主。君も、「いゝ小説」主義なんだね。主義なく理想なき文壇は、事勿れ主義の文壇だ。その日暮しの文壇だ。そして、その日暮しの標語は「いゝ小説をかくことだ」

客。いゝ小説をかくことは、語を換へて云へば、藝術至上主義で大變結構なことぢやないですか。

主。(輕蔑を交へた調子で)藝術至上主義、君はまだそんな言葉を使つて居るのかい。藝術至上主義なんて、藝術家の羅り易い感傷病だよ。その癖、此の病からいゝ作品なんか決して生れつこはないんだ。「いゝ小説」を書く、それは藝術本位の體裁のいゝ言葉には違ないが、それと同時に、作家をして苟安を貪ほらせ易い生氣のない言葉だ。人生に對する感激や理想を無くした作家に限つて、「いゝ小説主義」に走り安い。安價なる藝術至上主義は、頽廢小説家の隠れ場所だ。「いゝ小説主義」の所産は、巧みな技巧の外には何も無い。人生に對する考へ方や觀方が固定し、感激や理想を無くした者が、「いゝ小説」をかかうとする以上、勢ひ技巧を練るより外に、苦心をする所はないからだ。

客。そんな感激や理想が、以前にはあつたでせうか。

主。あつたね。四五年前の文壇には、人道主義的な感激が、凡ての作品の中に動いて居た。又表現や内容の點では、自然主義の平板無味に對する反抗があつた。そんな感激に依つて、創始された現在の文壇的時限タイムリミットは、最初の感激を無くして、平板無味な「いゝ小説主義」に墮してしまつた。今の文壇の標語を見給へ、「いゝものさへ書けばいゝのだ」と。その外には、何の理想も感激もないのだ。

客。「いゝ小説主義」で以つて、「いゝ小説」を書けば、文句はないぢやありませんか。

主。然しね。「いゝ小説」を書けばいゝ、それ丈の動機や感激丈で、「いゝ小説」は決して書けるものぢやないと思ふ。人生に對する新しい發見や感激が、作家を動して、初めて「いゝ小説」が書けるのではないかと思ふ。藝術上の新しい主義や主張があつて、始めて「いゝ小説」が書けるのではないかと思ふ。

客。それなら、新しい主義や運動が生れることを望んで居るのですね。

主。我々の感激を咬る主義や運動が、容易に生れないことは、知つて居るが、たゞ「いゝ小説主義」丈では困まるね。何か新しい旗旗が欲しいのだ、人間は案外子供だから、旗

旗に依つて感激を唆られるのだ。「いゝ小説主義」乃至藝術至上主義は、新しい旗旗の間に合はないときに、一時出して置く昔から使ひ古した旗だ。昔から使ひ古された丈に間違のないものには違ない。それと同時に、無意味なものなのだ。丁度新しい道徳上の理想が間に合はないときに、「いい人間になれ」と云つたやうな古くさい格言を繰り返して居るやうなものだ。

客。現在の文壇が旗旗を失くしたところ、新しく出ようとする新進作家の陣営には新しい白旗か何かを翻つて居やしないですか。

主。さう思つて、注意して見たのだが、白樺が當時の文壇に對して翻した反旗のやうなもの、少しも見えないね。現文壇の延長であり、後繼であるかも知れないが、決して別なものではないね。現文壇の内容や表現をそのまま、受け續いで居るのだから。末流文壇だと云はれたつて仕方がないと思ふ。新進作家に望むものは、現在の作家と何處か違つたものを持つて居ることだ。それが、どんなに小さいものでも不完全なものでもいいが。

人生に對する新しい思想藝術に對する新しい主張があつてこそ、次の時代の意義があるのだ。たゞ年齢丈で、次の時代であつたつて、何になるのだ。

客。現在の中堅作家が、新進作家の擡頭を邪魔をして居ると云ふやうな非難がありますね。主。馬鹿な。そんなイヤな嫌疑をかけられるのが不愉快だから、云ふべきことも、云はないで居るのだ。

客。旗旗と云ふ話でしたが、流行作家反對とか、ジャアナリズム反對だとか、いろ／＼な旗があるぢやありませんか。

主。文壇の革新を企てるものは、人生觀上藝術上の旗旗を擁して來るべきものだ。尊王攘夷と云つたやうな大義名分を提げて來るべきものだ。流行作家横暴とか、ジャアナリズムの弊などを、彼は云ふのは、堂々たる旗旗のないために、赤紙や白紙の小旗を振つて居るやうなものぢやないか。

○

客。ジャアナリズムは文壇を毒するものでせうか。

主。ジャアナリズムと云へば、盜賊とか妖婦など、云ふ言葉と同じやうに、悪いものだと定めて居るのは、文壇人の悪い癖だね。誰かど、ジャアナリズムの弊と云ふやうなことを云ふと、皆ジャアナリズムは、弊丈しかないと思ひ詰めてしまふのだ。が、僕は、ジャアナリズムの弊を認める前に、その大功を認めずには居られないね。

客。そんなに功積がありますかね。

主。一體、日本の文藝の水準を、現在の程度にまで上げたのは、主としてジャアナリズムの功積だと思ふね。外國文學の普及化の如き、外國思想の輸入の如き、主としてジャアナリズムの功である。露國の諸文豪、北歐の近代劇作家、佛蘭西の小説家、哲學的思想家、社會主義の各思想家、さう云ふものを矢繼早に輸入したのは、主としてジャアナリズムの功積ではないか。或る人々は、朝にタゴールを迎へ、夕にベルグソンを迎へ、翌朝はラッセルを迎へると云つたやうな、無節操な態度を非難するけれども、輸入された

ものは輸入されたものである。さうした文豪の作品なり、思想家の思想なりが、日本の文化に影響した點は、絶大であると云つてもいい。日本の眞の精神文明に貢献した點から云へば、ジャアナリズムは文部省以上かも知れない。

客。が、然し創作界のこと丈を考へると、ジャアナリズムは、盛名のある作家丈を追ふて、實力ある無名作家を容れないと云ふではありませんか。

主。盾の向ふ側と此方側ちや、さうまで考が違ふかね。僕が考へれば、文壇が新陳代謝するのには、ジャアナリズムのためだと思ふ。ジャアナリズムのために、新進作家の進路が開かれないと云つたやうな説は、風があるので紙薦が揚らないと云ふのと同じだと思ふ。今の文壇から、新聞の文藝欄と新潮（何も新潮がジャアナリズムの典型と云ふのではないが）と云つたやうな雑誌を無くすれば、一度名を成した作家は長く、その位置を保ち、無名の作家は出世の機なくして、現在より以上に悶々するだらうと思ふ。新を追ひ舊を壓ふジャアナリズムがあつてこそ、文壇に新陳代謝が烈しいのだ。ジャアナリズムの振

はなかつた明治三十年代に、硯友社一派が、長く平門の奢りをつゞけて居たことを見るがいゝ。ジャアナリズムの弊を恨むのは、有名作家のことだ。無名作家がジャアナリズムを恨むのは、江を下らんとして、流の早きを恨むやうなものだ。もつとも、流に棹す丈の能力のないものは、流の早きことを恨むのは尤もだが。

客。然し、さうは云ふものゝ、各雑誌の名前本位はいい傾向ぢやありませんね。

主。それは、確かにさうだね。日本のジャアナリズムの第一の缺點は、ジャアナリストに、作品の本當に分る人が、少いと云ふことだ。外國の雑誌の編輯者が、多くは文壇の權威であつて、よく新進作家を認めて、野に遺賢なからしめることから比べると、日本の編輯者は、一二の人を除く外心細い。その編輯者が採擇した丈で、その作品が相當のメリットを保證されるやうな、いゝ編輯者があるといゝのだが。

○

客。あまり、こんな話ばかりをするとまた、文壇意識ばかりで物を云つて居ると云はれさう、

ですから、何か別な話をしようぢやありませんか。

主。(苦笑しながら)此間、最近の英國の小説と米國の小説とを少し読んで居たが、少しも感心しなかつた。

客。日本の小説と孰どちらです。

主。僕は、日本の小説の方が遙に面白いと思ふね。

客。ロシアやフランスの最近の小説は何うでせうか。

主。ロシアは革命で、滅茶々だらうし、フランスだつて、バルビユスものなどを、讀んでもあまり感心しないし、日本の小説は現在のところでは、世界の何處と比べたつて、さう遜色ひんじやくがあらうとは思はれないね。

客。そんなことを云ふと、皆から笑はれますよ。

主。さうかも知れないね。日本の文壇なんて、可笑しなところだよ。偉さうなことを云ひながら、極端な西洋崇拜だからね。新しい物徂徠が、ウヨ／＼して居るのだからね。殊

に、甚しいのはロシア文學崇拜だ。トルストイや、ドストエフスキイは、彼等に取つて孔孟なのだからね。

客。どうして、さうまで心酔したのでせう。

主。なに、日本の古典も讀まなければ、明治大正の小説も、ロク／＼讀まないで、文藝的物心が付くと、直ぐロシア文學の翻譯を讀むのだ。初めて讀む文學だから、妄に感心する。それに耳許では絶えず「トルストイは、偉大である」「ドストエフスキイは、驚異である」と云つたやうな先輩達の聲を聞くのだから、理非分別の付かない青年は、滅茶々に、感心してしまふのだ。

客。だが、その先輩達は、どうしたのです。

主。先輩達は、先輩達で、外國の批評家に耳許で囁かれて居るのだ。外國の小説を、外國の批評家の手引で讀み、それで妄に感心した結果は、日本の小説を貶し始めるのだ。丁度洋行歸りが事々に日本を貶すのと同じだね。ロシア文學の諸文豪だつて、偉いには違な

いが、いゝ加減に卒業するんだね。チエホフの小説なんかだつて、我々が讀んで下らないと思ふのが、幾何でもあるんだからね。

客。ちや、日本の小説は、そんなにいゝんですか。

主。僕は、在來の日本文學の上に、ありとあらゆる外國文學の影響を受けて居るのだから、特異な發達を遂げて居ると信ずる。米國が世界の各人種の、一大坩堝であるやうに、日本文學は同じ意味で、世界文學の一大坩堝であらうと思ふ。日本の小説が、今少し外國語に譯されるれば、外國の批評家は屹度日本の小説の價值を認めるだらうと思ふ。さうなれば、外國の批評家のお聲がよりだから、日本の文壇の物祖來連中も、初て自國の小説の價值を云々し始めるだらうと思ふ。丁度、シヨオの作品が、獨逸の批評家に依つて認められて、自國へ逆輸入したやうに。



主  
流  
と  
傍  
流

△主流傍流と云ふことは、一つは数の問題である。現在の作家百人の中で、八九十人迄が、A主義を奉じ、他の一二十人が、B主義を奉じて居るとする。A主義の作家は数の點から云へば主流である。B主義の作家達は明かに傍流である。此の意味で明治四十年頃の文壇の主流は、自然主義であつたと確言することが出来る。

△が、主流傍流を質の問題とする。即ち、B主義を奉じて居る作家は、一二十人に過ぎないとして、彼等の書いて居る作品が、A主義を奉じて居る他の八九十人の作家の作品よりも、質に於て秀れ明に、その時代の人心を支配して居るとする。質から論ずれば、B主義の作家達は、数は少いけれども、明にその時代の主流である。此の意味で、五六年前の文壇で、白樺派の人達は、明に文壇の主流であつたと、云つてもいいだらう。

△數で、主流傍流を區別するのは、手輕である。現代の作家の名前を列擧し、その主要な特色で、區別して行けば、A主義傾向の作家が幾人、B主義傾向の作家が幾人と、略々人爲的な區別が付かないことはない。が、さうした價值判斷の伴はない、數丈の區別は、最初より行はざるに如くはない。

△が、質で區別するとなると、それは至難である。文藝批評に伴ふ凡ての困難が、其處に起つて来る。A主義の作家の作品と、B主義の作家の作品の價值を適當に批判し、それに對して、正當なる價值判斷を下すことは、聰明神の如き批評家にさへ至難なことであらうと思ふ。従つて、現代に在つて、現代の文壇に、主流傍流の區別を、質の點から、行ふことは、潛越無謀の批評家の外は、何人も難しとするだらうと思ふ。

△質から、主流傍流を別つ事が出来ないとすれば、我々は數に依つて、主流傍流を別つ外はない。然し、此の場合は、主流と云はれても傍流と云はれても、恥でもなければ名譽でもない。

△が、數から云つても、現代の文壇は、主流傍流とハッキリ別つことが出来るだらうか。それほど、現代の文壇は截然たる主流と傍流とに別れて居るだらうか。丁度、泉水の中の緋鯉と黒鯉とが、お互に自分の方が、主流だくと云つて居るやうなもので、赤と黒との區別こそあれ、高所から見れば同じ鯉であるやうに、技巧の巧拙、題材の異常平凡、枚數の長短の差こそあれ、現代大小幾多の作家は、皆同じやうな傾向の同じやうな作家ではあるまいか。

△現代の作家の基調は、みんな一樣にリアリズムである。現實生活を描かなければ、リアリズムの作家でないやうに思つて居る、短見な批評家達は、芥川などの作品を、リアリズムと呼ぶことに躊躇するかも知れないが、芥川などは、その人生觀に於て、徹底したリアリストである。「人間派の連中の作品も、リアリズムである。味本位だとか。何とか、細暖簾のうまいもの屋か、何かのやうなことを云つて居るが、それは彼等の庖丁の一寸した使ひ工合で、材料はやつぱり、リアリズムである。まして、自然主義系統の作家達が、その

家傳のリアリズムから、一步も出て居ないことは云ふまでもない。

△が、リアリズムと云つても、それは手法だとか觀照とかの點であつて、精神に於て、われ／＼は人道主義的理想主義の色彩を帯びて居る。それは、獨り「白樺」派の作家がさうであるばかりでなく、それから一番遠いと思はれて居る「人間」派の諸君でもさうである。久米・正雄君の如き、あれで小説を書くと、時々人道主義的口吻を洩すのを見てもそれが判る。たゞ愛だとか正義だとか云ふことを、眞向に振り翳すのと、心の中で、ソツと思つて居るのとの違である。

△さう考へて來ると、現代の作家は手法と觀照との上では、リアリスチックで、精神の上ではアイデアリスチックで、どれもこれも、同じ泉水の中の同じ鯉である。中に、少し變つたやうな作家が居ると思ふと、それは鯉以下の鮒だつたりする。

△たゞ、現代の作家が、幾多の流派に別れて居るやうに見へるのは、たゞ題材の相違や、巧拙の相違である。たゞ一寸した作風の相違である。それに、各作家の個性が、纏ひ付い

て、萬花鏡のやうな絢爛さを示して居るが、煎じつめて見ると、同じ色硝子の破片である。

それは、個性の相違であつて、その作家の主義や傾向の相違では決してない。

△第一義的な所で區別せずに、第二義的第三義的な所で區別すれば出來ないことはない。即ち作風とか、題材の取方とか、描寫本位だとか、題目本位だとか、そんなことで區別するのである。それで、區別すれば、現代の文壇は、幾多の小流に別つことが出来る。中には、自分一人で流れて居る作家もある。そして、銘々自分の流れを、主流だと思つて居るだらう。が、こんな區別は、泉水の中の鯉を、その皮の色丈で、區別するのと同じである。文字通り皮相な別ち方である。

公開状を機縁として

自分に當てられた公開狀が、形式こそまぎらはないが、畢竟「菊池寛論」であることは、誰でも直ぐ考へ付く事だらう。公開狀は要するに批評である。たゞ、批評せらるゝ作者に、それに對する反駁の機會が同時に具へられたるところの批評である。批評の性質として、それが賞讃か非難かどちらかに傾くのは無論である。もし賞讃せられて居る場合、「如何にも貴君の説は正しい」と云ふことは、自讃も甚しいことになる。それかと云つて、非難せられて居る場合、「いや貴君の非難は間違つて居る」と云ふことも、同じやうに自家辯護の醜に類し易い。その上、自分が讃められて居る場合は、相手の論理の缺陷を見落し易く、自分が非難されて居る場合は、相手の論理の缺陷に氣付き易い。自分の個々の作品が批評の對象である場合ならば、もつと反駁もし易いが、對象が自分自身である丈に、一言一句

にも氣がさすやうに思はれる。従つて、自分は諸君か公開狀に於て、自分に就て書かれて居ることを機縁として、自分が自分及び自分の創作に就て、平常考へて居ることを述べさせて貰ふことにした。それが、公開狀に對する自分の答辯の方法である。

相田・夢南氏の公開狀を讀んで、自分が「忠直卿行狀記」や「恩讐の彼方に」などを書く意氣を欣んで呉れたことは、自分の此頃の心持と一致して居る。自分も自分の直接経験などに題材をとつて、コツ／＼としたツツのない作品をかくよりも、もつと大きいものと創作らしい作品を書きたいと思つて居る。自分の経験などをその儘かくなどよりも、人間も事件も心持も、凡て自分の力で創作したものをかきたいと思つて居る。手堅い作品で小さい成功を収めるよりも、大きいアムビシャスな作品で失敗したいと思つて居る。

相田氏が自分の文章に就て、云つたことはある程度迄自分も首肯した。たゞ自分の文章にある焦々しさが「僕が早く焦點を表現したい」と焦る所から、來ると云つたのは、氏の思ひ違である。若し自分の作品にある焦々しさがあるとするれば、自分が僅かの日數で書き

なぐつた故だと思ふ。殊に「恩讐の彼方に」などは、一身上の都合で、三四日の間にかき上げたので、表現の點では自分としても、丸切りなつて居ないと思つて居る。相田氏は「焦點を表現するに腐心する」など云はれるがあの作品などは焦點の所など（若しありとすれば）少しも書いて居ないだらうと思ふ。「忠直卿行狀記」なども同じ位の短時日にかいたものである。尤も、こんなことを、自分の文章の粗雑な云ひ譯にするのではないが、いつも短い時間で急いでかく爲に自分の粗雑な文章が愈々粗雑になるとは事實だから仕方がない。尤も、自分も此頃は、充分暇を得て居るから之からはもつと表現の點に於ても、出來る丈の努力をしたい。

相田氏が僕の「まどつく先生」を、僕の道德とか解決とか々現はれて居る作品のやうに、取つて居られるのは、少し可笑しいと思ふ。僕は、あの作品をホンの教室内のスケッチとしてかいたので、あの作品に何か僕の意向がは入つて居るやうに取られるのは、餘りに物事を重大に考へ過ぎはしないかと思ふ。

最後に相田氏の人間性に對する信仰は、餘りに誇大ではないでしょうか。「解決とか道徳とか云ひ切れない所に人間性がある」と云はれるが、本當の人間性本當の人生味と云ふものを描き出す丈で、我々の能事は了つて居るのででしょうか。本當の人間性と云ふものは、貴君が思つて居るよりも、もつと頼りにならない、掴まへ所のない、盲目的なものではないでしょうか。泥棒にも人間性がある」と云つて、ぢつと見詰めて居る丈で、我々現代の苦惱が救はれるでしょうか。放蕩にも、姦通にも、その他凡ての悪いことにも、人間的なところがあると云つて、ぢつと見詰めて居る丈で世の中が少しでもよくなつて行くでしょうか。私は、人間性に萌して居ることでも、悪いことや、無意味なことなどは、それを批判することなしには、小説にかいてもつまらないと思ひます。その上、露西亞あたりの偉大なる人達が、人間性に就いて、何れほど多くの作品をかいたでしょう。日本の作家などが、いくら人間性を取り扱つても、屋上屋を架する笑ひを招く丈でしょう。人間性に就いては、今迄の偉大なる人々が、充分描き盡くして呉れたと思ひます。私は、それを土臺として、

(誰人もがそれを土臺とする権利がある如く)別な新しいことをする方が、本當の仕事ではないかと思つて居るのです。それは、とても僕などには及びもつかない偉大なる作家の仕事だと思つて居ます。しかし、私は理想としてはそんなことを考へて居るのです。

志賀匠平氏の公開狀 志賀氏は、自分に對して之で二度目の公開狀を書かれた譯である。最初は、廣津和郎氏宛のものであつたけれども、内容に於て同時に、自分宛てのものであつたから、自分はその當時にも同氏にお答へして置いた。

自分は、志賀氏の批評家としての頭によさは充分認めて居るが、廣津氏を感嘆せしめた「本當の暗さ即ちそれは本當の明るさ」(覺え違があるかも知れないが)と云つた様な言葉遣ひは、自分には何うも判らない。自分は本當の暗さは何處迄行つても本當の暗さで、それが明るくなる場合は、何うしても考へられない。若しさう云ふ場合がありとすれば、その暗さが明るさかの孰ちらかと偽せ物であると思ふより外はない。

氏の僕の作品に對する非難、事件の経過や心理過程はよく描きだされて居ながら、空間



的なシーンが浮ばないと云ふ非難は、僕自身とつくから考へて居る所です。然し、その原因は僕が対象を「全」として観得ない爲でなく、「全」として描き出す丈の作家的能力がない爲だと、思つて居るのです。それから、テーマが露骨な作品が、なぜ「明るい」のか、作の「厚さ」は何故にテーマなどよりも大事なのか、さう云ふ事は、氏が「明るい」とか「厚さ」だとか、氏自身の感じから出て居る言葉を、説明しない中は誰にも首肯が出来ない。自分は氏が、「厚さ」だとか「暗さ」だとか「明るさ」など云ふ言葉を、矢鱈に使ひ廻すことを少し悪傾向だとも思ふ。かうした曖昧な言葉を使ふのも印象批評の弊だと思ふが、作品の特質をかうした言葉で、ごまかして置くことは氏の批評的精神の缺乏を示しては居ないだらうか。自分の受くる「暗い」とか「明るい」とか云ふ感じを分析して行つて、その感じを起させる本質を作品の中に見出すことが、批評家の職責ではないだらうか。

同氏の「迷ふ迄の深さに行つて、然も尙迷はなかつたでせうか」と云ふ言葉は、有難く聴きました。

それから、最後の方の志賀氏の「健全性は不健全になることなく、もつと深さと厚さとを得ることが出来る」と云ふ氏の言葉は、一つの理想アイデアであつて僕も氏の云はれる通り其方向へ進んで行くことに少しも異議はない。

佐藤一英氏の公開状は所々變な所があるが、然し僕の心持を一番よく知つて呉れて居るものだと思ふ。殊に、作品に對する一々の理解は、一寸感謝してもいいものがある。殊に「悪魔の弟子」「身投救助業」「病人と健康者」「敵の葬式」などの作のモチーフをあゝ云ふ風に、正當に理解して呉れた人は、自分の知つて居る限りでは、氏が初めてある。自分の作品を、イゴイズムと云ふ言葉で解釋しようとする人々（江口・渙氏が自分の作品に、イゴイズムと云ふレッテルを貼つて以來大抵の人がさう云ふ風にしがちであるが）の多い中に、氏があゝ云ふ見方をして呉れたことは、有難い。

永見清吉氏の公開状 永見氏の余りに論理的なと云ふ非難も、志賀氏などの非難と一味通じて居て、之迄色々な人から受けたことのある非難である。

が、僕が作品と自身との間に、好奇的な不真面目なある餘裕があると云ふ非難に就ては、僕はそんな心持は少しもありません。然し作品の内に感ずる作家のさうした餘裕は僕の作品などよりも、自然主義當時の作品、茲に引き合に出すのは不倫の嫌ひがありますが、モウバサンの作品などに濃厚に出て居ないでしょうか。尤も僕の作品でも「海の中にて」などには、さうしたものがあつたことを僕は否みません。あの作品は、僕としては失敗の作品で著作集から抜きたい位に思つて居るのですが、題目が如何にも露骨に出て居る故でしょうか、之迄の評家が僕を論ずる場合には、いつも引合に出して僕がイゴイズムの作家であることの唯一の證據であるやうに、取扱はれるのにはその度毎に恐縮して居るのです。

箕輪青二氏の公開狀は、文藝に志して居る青年諸君とは、全く違つた眼で、僕の作品を見て居る點に於て、僕の興味を唆つた。殊に氏の「今日の道德の進化が餘りに遅いので、凡ゆる悲劇がこの間劇の間から發生して人を暗澹たらしめて居る。此の悲劇を作家の多く

は因果律の彼岸、即ち運命と見て終るが……」の所は、僕も全然同感した。現代の作品に現はれて居る悲劇や苦惱はその凡てだとは云はないが、多くは、人間がもう少し聰明でもう少し理智的であれば、もう少し徹底した新しい道德を樹立することが出来れば難なく除去し得るやうなものが、多くはないでしょうか。ある作家はある深淵の中に居る者の苦しみを克明に描いて居る。然しその人が何故に足を踏み外して深淵に陥つたかについては、少しも省察して居ない場合があります。深淵に陥つたことを不可抗力な運命だと思つて居るのが、案外その人の道德的な弱さなどから起つて居る人爲的な原因である場合がないだらうか。自分は、良にかゝつた人間の苦しみには同情する。それは、偽だとは決して思はない。然し、いつもその良はわづかの聰明やわづかの道德的勇氣などで避け得たものではないかと思はずに居られない。然し自然主義の残して行つた妙な運命主義に中毒して居る人達は、わづかの聰明やわづかの道德的勇氣のないこと迄も、それは性格に根ざして居る必至的な運命だと云ふかも知れない、然し自分はさうは信じたくない。人間

がそれほど頼りのない。それほど意氣地のないものだとは思はない。我々は我々の善良なる意志を培ふことに依つて、我々の生活から、運命の名のもとに不可抗力だと考へられて居た諸悪を、段々少くすることが出来ないものだらうか。自分は出来るものだと思ふ。

米岡寛之介氏の公開状に就いて、題目小説に就いて一言することの機会を得たことを欣ぶ。僕の見解に依れば、世の中にテーマのない小説などは存在しないと思ふのです。尤も、自然主義が盛んになつた當時は、テーマなる觀念が、段々薄れて行つたことは事實です。然し何んな自然派の小説にも題目はあると思ひます。ある作をする場合に、作家が「書かうと思つて居る事」があるのは當然なことではないでしょうか。「書かうと思つて居る事」は、何であつてもいい、それが即ち題目です。たゞ自然主義の隆盛の當時には、眞實なることは凡て小説の題目として許された爲に、題目が段々平凡な意味になつてしまつたのです、當時の小説が、外國に翻譯されて、外國人が「單なるスケッチ」だと云ふのは、題目が稀薄になつた爲だと思ひます。ある事件が眞實であるばかりでなく、それが我々の生活

に對して何等かの意義がある場合に、私は自分の小説の題目として初て價值があるものだと思ふのです。私は自然主義時代の作家のやうに、それが「眞實である」と云ふ理由丈では、一行もかきたくありません。私は、やつぱりある事件の内に意義を見出すには、その事件をかきたくありません。私が題目が大事だと云ふのはかうした意味です。

社會主義に就て

資本主義を基本とする現在の社會組織が、ホンの一部分の者のために、多數の人間を如何に不正に不當に虐げて居るか云ふこと、又それに對抗して起つた社會主義の理論が大體に於て眞理であることは、少しでも思索的良心のある者の否定し得ない所であると思ふ。世の中が、社會主義化することは、たゞ時の問題である。時と手段の問題が残つて居る丈である。

社會主義その物が、合理であると同じやうに、社會主義化する手段も、出来る丈合理でありたいと思ふ。改造の徑路に於て日本が現在の露西亞のやうな混亂に陥ちるか、何うかは現在の日本國民全體の心掛一つにあると思ふ。勞働者が自覺して、猛獅の如く立ち上る前に、現在の特權階級が翻然として、その非を知ることが、緊急なことであると思ふ。繼

新の時の大名の藩籍奉還が、多く混亂から日本を救つたやうに資本家が自覺して彼等の不當な不正なことから脱出することが、將來の日本を混亂から救ふ、第一の良策である。

どうせ一度は、投げ出されなければならない以上、彼等が自から進んで投げ出すことが、ヒロイックであると同時に、資本主義のせめてもの罪滅しとなるであらう。さうした贖罪に依つて新しき社會組織に於ても、資本家たりしが故を以て、轢子扱ひにされることから免れ得るだらうと思ふ。

が、人間の慾は、限りがない。資本家達が「まだいゝゝ」と、彼等の整澤な坐り心地よい椅子から、腰を上げないで居る内に、「まだいゝゝ」筈であつた世の中は、何時の間にか「もう遅く」なつて居るだらう。進んで投げ出し得る権利と機會とを失つた時は、大なる時勢の鐵腕は彼等の位置を奪つた上に、彼等自身さへが何人からも徵集しなかつたやうな延滞利息を責めはたることだらう。

社會主義など、云つて、一部の人々丈の主張議論だと思つて居る内に、それが何時の間にか現在の社會組織の下積になつて居る國民の大多數の思想となり宗教となり信仰となつて行くだらうと思ふ。

社會主義者の同盟を警視廳で禁ずると云ふ。國家主義資本主義の宣傳機關として、國家のあらゆる機關を利用し得る政府が、力も金もない烏合の集の同盟が何故そんなに恐ろしいのだらうか、その恐怖は烏合の集に對する恐怖でなく、彼等が懐いて居る眞理その物に對する恐怖だらう。そして、それは確に彼等の恐怖に償して居る。

現在の政府當局者は、よく何々調査會と云ふのを起すのが好きだ。社會主義者の同盟などを取締る前に、眞に時代を知る憂世の人々を集めて、社會主義を基本とする大改造調査會を作つて、改造の手段と時期とを考究したら何うだらう。

「まだ大丈夫だ」と思つて居る中に、一度時勢の大石が轉落し始めたら、觸るゝものを悉く慘害しつゝ何處まで落ちて行くか分らないと思ふ。

小説家たらんとする青年に與ふ

僕は先づ、「二十五歳未満の者、小説を書くべからず」といふ規則を拵へたい。全く、十七、十八乃至二十歳で、小説を書いたつて、しやうがないと思ふ。

とにかく、小説を書くには、文章だとか、技巧だとか、そんなものよりも、ある程度に、生活を知るといふことと、ある程度に、人生に對する考へ、所謂人生觀といふべきものを、きちんと持つといふことが必要である。

兎に角、どんなものでも、自分自身、獨特の哲學と云つたものを持つことが必要だと思ふ。それが出来るまでは、小説を書いたつて、たゞの遊戯に過ぎないと思ふ。だから、二十歳前後の青年が、小説を持つて來て、「見てくれ」と云ふものがあつても、實際、挨拶のしやうがないのだ。で、とにかく、人生といふものに對しての自分自身の考へを持つやうにな



れば、それが小説を書く準備としては第一であつて、それより以上、注意することは無い。小説を實際に書くなどといふことは、すつと末の末だと思ふ。

實際、小説を書く練習といふことには、人生といふものに對して、これをどんな風に見るかといふこと、——つまり、人生を見る眼を、段々はつきりさせてゆく、それが一番大切なのである。

吾々が小説を書くにしても、頭の中で、材料を考へてゐるのに三四ヶ月もかゝり、いざ書くとなると二日三日で出来上つてしまふが、それと同じく、小説を書く修業も、色々なことを考へたり、或は世の中を見たりすることに七八年もかゝつて、いざ紙に向つて書くのは、一番最後の半年か一年でいゝと思ふ。

小説を書くといふことは、決して、紙に向つて、筆を動かすことではない。吾々の平生の生活が、それ／＼小説を書いてゐるといふことになり、また、その中で、小説を作つてゐるべき筈だ。どうもこの本末を顛倒してゐる人が多くて困る。一寸一二年も、文學に親し

むと、すぐもう、小説を書いたがる。しかしそれでは駄目だ。だから、小説を書くといふことは、紙に向つて、筆を動かすことではなく、日常生活の中に、自分を見ることだ。即ち、日常生活が小説を書くための修業なのだ。學生なら學校生活、職工ならその勞働、會社員は會社の仕事、各々の生活をすればいゝ。而して、小説を書く修業をするが本當だと思ふ。

では、たゞ生活してさへ行つたら、それでいゝかと云ふに、決してさうではない。生活し乍ら、色々な作家が、どういふ風に、人生を見たかを知ることが大切だ。それには、矢張、多く讀むことが必要だ。

そして、それら多くの作家が、如何なる風に人生を見てゐるかといふことを、参考として、そして、自分が新らしく、自分の考へで人生を見るのだ。言ひ換へれば、どんなに小さくとも、どんなに曲つてゐても、自分一個の人生觀といふものを、築き上げて行くことだ。

かういふ風に、自分自身の人生観——さういふものが出来れば、小説といふものも、自然に作られる。もうその表現の形式は、自然と浮んで来るのだ。自分の考へでは、——その作者の人生観が、世の中の事に觸れ、折に觸れて、表はれ出たものが小説なのである。即ち、小説といふものは、或る人生観を持った作家が、世の中の事象に事よせて、自分の人生観を發表したものである。

だから、さういふ意味で、小説を書く前に、先づ、自分の人生観をつくり上げることが大切だと思ふ。

そこで、まだ世の中を見る眼、それから人生に對する考へ、そんなものが、ハッキリと定まつてゐない、獨特のものを持つてゐない、二十五歳未満の青少年が、小説を書いても、それは無意味だし、また、しやうがないのである。

さういふ青年時代は、たゞ、色々な作品を読んで、また實際に、生活をして、自分自身の人生に對する考へを、的確に、築き上げて行くべき時代だと思ふ。尤も、遊戯として、

文藝に親しむ人や、或は又、趣味として、之を愛する人達は、よし十七八で小説を書かうが、二十歳で創作をしようが、それはその人の勝手である。苟くも、本當に小説家にならうとする者は、須らく隱忍自重して、よく頭を養ひ、よく眼をこやし、満を持して放たないといふ覺悟がなければならぬ。

僕なんかも、始めて、小説といふものを書いたのは、二十八の年だ。それまでは、小説といつたものは、全く一つも書いたことはない。紙に向つて小説を書く練習なんか、少しも要らないのだ。

兎に角、自分が、書きたいこと、發表したいもの、また發表して價值のあるもの、さういふものが、頭に出來た時には、表現の形は、恰も、影の形に従ふが如く、自然と出て來るものだ。

そこで、所謂小説を書くには、小手先の技巧なんかは、何んにも要らないのだ。短篇なんかを一すうまく纏める技巧、そんなものは、これからは何の役にも立たない。

これほど、文藝が発達して来て、小説が盛んに読まれてゐる以上、相當に文學の才のある人は、誰でもうまく書くと思ふ。

そんなら、何處で勝つかと云へば、技巧の中に匿された人生觀、哲學で、自分を見せて行くより、しやうがないと思ふ。

だから、本當の小説家になるのに、一番困る人は、二十二三歳で、相當にうまい短篇が書ける人だ。だから、小説家たらしとする者は、さういふやうな、一寸した文藝上の遊戲に耽ることをよして、専心に、人生に對する修業を勵むべきではないか。

それから、小説を書くのに、一番大切なのは、生活をしたといふことである。實際、古語にも「可愛い子には旅をさせろ」といふが、それと同じく、小説を書くには、若い時代の苦勞が第一なのだ。金のある人などは、眞に生活の苦勞を知ることが出来ないかも知れないが、兎に角、若い人は、つぶさに人生の辛酸を嘗めることが大切である。

作品の背後に、生活といふもの、苦勞があるとなつては、人生味といつたものが、何

といつても稀薄だ。だから、その人が、過去に於て、生活したといふことは、その作家として立つ第一の要素であると思ふ。さういふ意味からも、本當に作家となる人は、くだらない短篇なんか書かずに、専ら生活に没頭して、將來、作家として立つための材料を、蒐集すべきである。

かくの如く、生活して行き、而して、人間として、生きて行くといふこと、それが、即ち、小説を書くための修業として第一だと思ふ。

文學志望者の讀むべき書物

文學志望の人達から、先づどんな書物を讀めばいゝかと云ふことをよく訊かれる。中學を出た位の人で、これから文藝を味つて行かうとする人を標準として、讀むべき書物を書き上げて見度いと思ふ。文學入門の書籍と云つてもいゝ。文藝を味はうとする人、小説でも作らうとする人は、先づ此の位の本は讀む必要があるかも知れないと思ふ。心付くまいに擧げたのであるから、撰擇にはムラがあるかも知れない。

日本の古典では、

一 萬葉集

是非讀まなければならぬまい。日本の文學の最初の恒星である。萬葉假名のでは難しい

から、普通の假名に書き直したのを読むといふ。

### 一 平家物語

此の時代のもものでは、源氏物語にしる、枕草紙にしる、難しくていけない。平家物語は割合にやさしく面白く、それで時代の生活なり考へ方なりがよく分かる。その上、この中の史實は後世の文學に多くの材料を供給してゐるから。

### 一 太平記

前と同じやうな意味で。重要さは劣るけれども。

### 一 徒然草

やゝ倫を失して居るけれども、好個の小論エッセイとして、昔の日本人の思想が分るから。

### 一 芭蕉その他

芭蕉の俳句は、一度味讀する必要がある。その弟子達のものも合せて讀むといふ。

### 一 近松

近松の淨瑠璃は、有名なもの丈けでもゼヒ讀むといふ。

### 一 西鶴

日本文學の權威。短篇作家として世界的にも無類な人。少し難しいが、ゼヒ讀んで欲しい。

### 一 秋成、馬琴、三馬、一九

秋成の雨月物語は、好個の短篇小説集として、馬琴の八犬傳は大傳奇小説として、一讀を勧める。八犬傳を讀むと、和漢の古事來歴を覺える丈でも利益である。三馬一九なども、近代の小説として一讀してもいふ。

これ丈で、非常に少いが、然し列挙して行けば限がない、これ丈先づ読めば、その次ぎに読むべきものは、自分で見當が付くと思ふ。

明治大正時代では、

### 一 紅葉、露伴、一葉

一通は読むといふ。併せて柳浪、鏡花、眉山などの代表作も読めばいい。

### 一 自然派の諸作家

日本の自然主義の作品は、特に注意して讀まなければならない。そして、銘々にリアリズムの洗禮を受ける必要がある。その意味で、二葉亭、獨歩、花袋、秋聲、白鳥などの代表的作品に目を通して貰ひたい。

### 一 白樺派の諸作家

現代の文壇は白樺派の作家の影響が多いから、是非注意して讀むといふ、特にその勃興時代の作品を味ふといふ。

### 一 現代の作家

誰を讀め、誰を讀むな、と云ふことは云へない。各作家について、その代表的作品を二三篇宛讀んで、自分に氣に入つたら、その作家を深く研究するといふ。

小説本位に考へたから、詩歌は入れなかつた。

外國では、(翻譯のあるもの丈で云ふ)

### 一 聖書

心を養ふ上からも、又外國の文學(此頃では日本の文學にも)に無數の材料を供給してゐる點から。

一 アラビヤ夜話

外國的な奔放な空想、面白い説話の本として。

一 ギリシヤ神話

外國の文學に多くの材料を供給して居る點、及び話の面白い點で。

一 沙翁の戯曲

日本で非常に有名だから、ハムレットやマクベスなどは讀んでをいたらい。現代のものでは、

一 英國

是非讀まなければならぬものはないが、ワイルドやショオのものは、一二篇讀んでもいい、殊にワイルドのサロメなど。

一 北歐

イブセン、ストリンドベルヒ。殊に、ストリンドベルヒは出来る丈讀むといふ。ストリンドベルヒを卒業すれば立派なものだ。

一 獨逸

是非にと云ふことはない。が、シュニツレル、ヘツベル、ハウプトマンなど、一二篇づつ讀むといふ。

一 佛蘭西

メリメ、モウパサンの短篇。フローベール、ゴンクールの小説。近くはロマン、ローランのジヤンクリストフ。殊に小説を書かうと思ふものは、メリメやモウパサンを讀んで一通の手法を學ぶといふ。

一 白國



メエアルリンク、非常に偉い作家など、は思はないが、日本の文壇に、嫌に影響して居るから。

### 一 露 西 亞

① トルストイ。ドストエフスキイ。讀める丈讀むといふ。チエホフの短篇及び戯曲、充分味讀するといふ。その他、アルツイバアセフ、ザイチエフなど、暇があれば讀むといふ。

非常に大雑把だが、これ文目を通して居れば、文藝を談じて、耻をかくことはないと思ふ。讀んで行く裡に、感銘した作家があれば、その作家に喰ひ付いて行つて、そして自分の行く道を開くといふ。ザット多くの作家に目を通して、その中の好きな作家に就いては全部讀む。凡てに就て少し宛を、少しの物に就ては凡てを、文學修養の讀書の要領もそれだ。

## 暗 黒 時 代

僕などは、青春時代は、貧乏であつたためと、異性の注意を惹くやうな容貌を持合せて居なかつたため、戀愛の點でも性慾の點でも、危険な境遇に陥つたことなどは一度もない。ただ生活に對する考、生に對する考が定まらないため、極端な個人主義や、淺薄な虛無主義に陥り、出處進退が出鱈目であつたため、中學卒業後の五六年は僕としては暗黒時代で、入學した官立の學校を二度も途中で、退學するやうな仕末で、僕が大學を出たときなども、友人の久米などは、「君はよく大學を出られたな」と、云つて感心して呉れたほどだつた。高等學校から大學に移つる折など、殆んど一身の破滅を來たさんとし、その間をどうして切り抜けて來たか、自分でも不思議な位だ。

さう云ふ意味で、自分などは最も危険なる青春時代を過した一人だと云つてよいだらう。

（ヨリ）  
余も亦然り

一三三

が、然し自分は、青春時代丈が、特別に危険な年齢だとはどうしても思ひ得ない。殊に、作家として奔放な生活を送つて居る自分などは、五十の聲のかゝるまでは、凡て危険年齢である。否、自分ばかりでもあるまい。人間はあらゆる年齢を通じて、その人間が、人間らしい感情や思想を持つて居る限りは、ある程度の誘惑に晒されて居ると云つても過言ではあるまい。感情が硬化し、思想が標本の如く古くさくなつて居ない限、青春時代丈の危険を、道學者の如き口吻を以て、指摘する勇氣はない。誤ちは人間の事なりと云ふから。

予の淺草觀

自分が、淺草が好きなのは活動寫眞があるからである。

ある劇場當事者が、その高い入場料を辯解して曰く「此頃ちや活動寫眞でも、特等一圓五十錢も取るのですからね」と。自分は聞いて居て可笑しかつた。「活動寫眞でも一圓五十錢では入れるのだ。現在のやうな下らない芝居を、五圓も十圓も拂つて入る奴があるものか」と、思つた。

が此人の言葉は、活動と芝居とに對する普通人の考を、よく云ひ現はして居る。芝居に對する因襲的な尊敬に囚はれて居るために、活動の眞價が、分らない人の考をよく云ひ現はして居る。

が、虚心平氣に活動と芝居とを比べると、思ひ半に過ぎるものがあらう。スクリーンに

出て来る潑刺たる名女優達の美しさと、日本の女形の不自然な變生男子的な醜さを比べた丈でも、澤山だと思ふ。

而も、スクリーンの上の世界は、我々には可なり親しみがある。同じ日本人の世界でも、歌舞伎の世界と我々との生活には、百年二百年も時代の隔りがある。主君のために、妻を賣つたり、子を殺したりする道徳は、我々には堪らない。映畫の世界は、外國ではあるけれども、我々の生活感情とピッタリと一致する。映畫の内容にも、近代味もあれば藝術味もある。

つい最近に見たジエイ エム バリーのアドミラブルクライトン(改題「男性と女性」)などを考へて、日本の芝居などでは、容易に見られない新味もあれば、藝術味もあつたと思ふ。

今でも、活動寫眞に對して、毛嫌ひをして居る人、活動と云へばピストルを打つたり、追ひかけたりすることだと思ふ人は、ぜひ一度活動を見直す必要があると思ふ。

活動を見るには、是非とも淺草へ行く必要があると思ふ。同じ映畫でも、淺草で見るのでは、氣持が違ふ、吉原と岡場所位に違ふと思ふ。

又帝劇や國技館でやる大觸込みの大物は、大抵は下らないものである。「イントレランス」にしる、「世界の心」にしる「ロミオとジュリエット」にしる、自分は少しも感心しなかつた。

やつぱり五卷物位の人情物に、題材も秀れて立派なものがある。戯曲としても立派なものがある。役者も、あまり美貌を持つて居ない女優に、秀れた演技を持つて居るのが居る。現在の淺草では、西洋物専門の館は電氣館帝國館キネマ俱樂部千代田館の四つである。中でも、キネマ俱樂部は、館の構造が一番よく、座席も快い。近來何うしたのか餘りいゝ映畫が出ないやうである。千代田館は、つひ此間開業したばかりである。ゴールウキンなどの傑作品を紹介して居るのに拘はらず、館に馴染のないためか、客足が可なり薄いやうである。

芝居の見物が、待合の女將や藝者や相場師や會社の重役など云つた所謂無識有産階級であるのに反し、淺草の見物は、最も進歩した民衆である。小生意氣で、不良少年味を帯びて居るが、常に新しがつて居る。英語のマークが出ると一齊に拍手を送る。キザと云へばキザだが、可愛いと云へば可愛い。が、之は街つて居るのではなく、淺草の見物は殊に電氣館あたりの見物は十中八九英語の題名や役割位は讀める連中である。寫眞と寫眞との間の奏樂の曲譜などは、大抵聞きかじつて居る連中である。かうした意味で、歌舞伎や帝劇の見物に比して、遙かに進歩して居る、連中である。大正活動寫眞會社が、映畫の題名を、英語で廣告して居るなどは、正に淺草の見物を理解して居るものである。

が、見物に比して、やゝ見劣りするものは、辯士である。まだ美文句調などを弄して、得々として居る人だとか、映畫中の人物の心理を下らなく忖度したり、また非常に意味の深い事件を、安價に淺薄に解釋したりするものが可なり多い。マークに出て居ることさへ、間違つたり、充分に説明出来ない辯士が居る。多くの辯士の中では、自分は帝國館の大辻

司郎のイヤ味の無いとほけた説明振りが好きである。盗人がは入る光景を説明して「勝手に知つたる他人の家」と云つたやうな名句を吐いて、見物を嬉しがらせる。

寫眞の題名の譯し方には、まだ活動固有の惡趣味が付き纏つて居る。中には、とんでもない誤譯がある。「名金」だとか「獸魂」など、不熟なその辯センセイシヨナルな翻譯で當てた味が忘れられないと見え、生硬な不熟な題名が付けられて居るのは嫌である。この點に、やゝ注意して居るのは、大正活動寫眞會社で、「懐しのケンタツキイ」など文學的譯語を付けてあるのは、愉快である。映畫の題から考へられる通、淺草の文化（變な使用方だが）は新しいが何處となく未熟で、生硬で、下品である。もつと、その趣味が上品になり、洗練されて來たならば、新しい興業、新しい舞臺藝術は淺草から起るかも知れない。

世の中には、まだ活動寫眞丈が少年に惡感化を及すと云つたやうな、妄説に囚はれて居る人がある。その人達のために、バーナード ショオの言葉を引いて置かう。曰く「活動

寫眞にだつて、一利一害はあるよ。字を書くことだつて、小供に書くことを教へると、それが彼等が詩を作るために役立つと同時に、小切手の偽造をする時にも役に立つよ」と。

活動寫眞の見物の事ばかり云つたが、その他の見物も、淺草は可なり進歩して居る。去年から今年にかけて、公園劇場で、セント ジョン ア、ヴキンの「オレンヂマン」、金龍館でロード ダンセニイの「失はれたるソルクハット」イエイツの「カスリイン ニブーリハン」をやつて居る。演出が、どんなにイカサマであるにしろ、愛蘭土劇が頻々として淺草に上演せらるゝのは、日本の現在の劇壇に對する大なる皮肉であると共に、自分達愛蘭土劇愛好者にとつては、快心の到りである。

金龍館と云へば、彼處で演ぜらるゝ木村時子などの「カフェイの一夜」と云つたやうなイカサマ喜歌劇も、退屈な歌舞伎芝居などに比べると勝ること萬々である。

## 芥川のこと

芥川に就いて一番感心してもいゝと思ふ點は、その藝術的精進の心である。言葉を換へて言へば、藝術上の覇氣、藝術上の向上心とも言ふ可きものである。さう云ふ意味で、僕なんかよりも芥川は藝術至上主義である。芥川にとつては藝術は彼の生活の大部分を占めてゐると言つてもいゝ。彼の希望も、生活も殆ど藝術にかゝつてゐると言つてもいゝ。芥川は元來負けぬ氣の男で、何をやつても他人には負けたくない男で、彼が勝負ごと一切手を出さないのは負ける事が嫌ひのためであるが、彼のかう云ふ優越慾若くは自尊心は、彼の藝術生活に於いても、芥川を驅つて不斷の努力をさせてゐるやうだ。さう云ふ意味で芥川は行き詰まることに苦んで、新らしい境涯を切り拓いて行くだらうと思ふから、自分は彼の將來に就いては可也安心してゐる。藝術家も藝術家的壯心がなくなると駄目だが、



芥川などは四十になつても五十になつても、かうした心持を失はないだらうと思ふ。

然し、芥川の壯心は彼の作品に時々悪い影響を與へない事はない。芥川作品にある藝術的の潤ひといふべきやうなものが比較的缺けてゐるのは、彼のかうした藝術的覇氣が作品の上に餘りに出るためでないかと思ふ。しかしそれと同時に、芥川はこの永久に消磨せざる藝術的壯心のために、たえず自分自身を鞭打つて、新しい展開を示して行くだらうと思ふ。

さう云ふ意味で、今の文壇に芥川ほど苦心する人は、さう澤山もないだらうと思ふ。彼の希望としては、芥川の藝術上の精進なり苦心なりが、たゞ、藝術上ばかりに止まらないで、彼の生活全體、彼の人生に對する考へ方、見方などの上にも、及んで欲しいと思つてゐる。それが芥川を藝術品として大成せしむる一つの道ではないかと思ふ。芥川の作風に就いては、世間ではいろいろのことを言つてゐるが、自分は彼を一個のリアリストだと思ふ。リアリストと云ふ意味は、彼の人生に對する態度がリアリストだと云ふことだ、作品

の單なる手法の點によるではないが。

それから、芥川の才だとか、技巧だとかいふことがよく問題になつてゐるやうだが、しかし芥川の場合に於いて、才だとか技巧とか言ふものは、たゞ、頭腦だとか、小手先だけの問題だけでなく、もつと彼の本質的の觀照や、感受性や、感覺に内在してゐるものだと思ふ。芥川だけの學問があつても、芥川のやうな物の見方や、描き方は出來ないと思ふ。さう言ふ意味で、彼の技巧だとか才だとか言ふものは、世間の評家が考へてゐるやうに、表面的なものでないと思ふ。技巧は個性なり、といふ言葉があるが、さういふ意味で、芥川の技巧は、本質的な、個性的な、他人がいくら學んでも、學びがたいほどのものだと思ふ。

人としての芥川は、いくらか、強もての方で、一般から可也近づきがたいやうに思はれてゐる。例へば、原稿をたのみに来る人なども、僕などと較べると可也少ないやうだ。文學青年などは近づきがたいやうに思つてゐるのかも知れない。が、それは反對で、芥川は

自分に近づいて来る人に對しては、可也親切だ。特に、自分を尊敬して近づいて来る者には、可也親切だ。それは所謂自尊心の強い人の缺點でもあり美點でもあると思ふが、芥川は尊敬して近づいて来る者には、下らない人間に對しても可也親切だ。しかし、自分の味方でない人々に對しては、何時も正面をきつてゐる。

もう一つ感心の事は、よく落ち着いて勉強してゐることだ。少しも心に無駄がなく、創作なり、讀書なりを、さう言ふ意味で、文壇第一の勉強家でないかと思ふ位だ。

子供が出来ないうちの芥川龍之介は、父として變でもあり、似合はなかつたが、この頃ではたあいもない、いゝお父うさんになつてゐる。子供を有たないうちは人生がほんたうにわかつてゐないといふやうな事を言つてゐた。

## 將棋の話

凡そ、あらゆる勝負事の中で、將棋ほど、テキパキして居るものはないだらう。勝は飽くまで勝である。負は飽くまで負である。敵將を擒縛して後止むのであるから、何等の妥協あるなしである。

然も、敵味方各々二十の馬子、盤面は八十一劃、而も其處に古今斯道の天才が、極め盡し得ざる玄妙不思議の變化があるのである。

兎に角、自分は將棋が好きである。一日に數回は盤に向ふ。むろん、相手がない時が多い。一人で古今の名局を指して見るのである。氣を換へるために、退屈紛ぎらしに、これほど適當なものはない。

我々の周囲でも、將棋は盛んである。今年になつてからも、文士將棋會が、三四度も催

された。幸田露伴先生の事は、あやに畏し。自稱天狗馬場孤蝶先生を初め、泉鏡花、志賀直哉、里見弴、久米正雄、水上瀧太郎、中村吉藏、田中純、小川未明、故岩野泡鳴、西宮藤朝、久米秀治、中村武羅夫、佐々木茂索、瀧井折柴、村松梢風の諸氏、畫家では松山省三、岡田三郎助、平岡權八郎、緒崎英朋氏等、いづれも同好の人である。

馬場孤蝶先生には「將棋の話」なる著書あり。將棋學の權威であるかも知れないが、實力餘りに貧弱、定跡の二三手は知つて居るけれども、その陣容のもろきこと、豈豆腐と撰まんやである。かう申すと、先生の自尊心を傷けて、甚だすまないが、義理にも強いとは申上げられない。泉、里見、久米、田中等の諸氏は孰れも五角、里見氏の指口は、その小説の技巧の如く飽くまで繊細である。久米氏は、その棒銀の攻口、中々鋭く、「どんな人とやつても、初の一歩は必ず勝つ」と豪語す。結果の豪語に添はざること、毎日なれども、よく先手の利を解せるは彼が天性の強味である。此の連中より稍々強いのは、小川、西宮、瀧井、久米秀治、松山、平岡等の諸氏であり、水上瀧太郎氏は、やゝ超群の強味を藏して

居るやうである。村松梢風氏の指口は、その情話の如く一味捨てがたき味を有し、小川未明氏の指口は線香花火の如くバツ／＼として、眼にも止まらず、飛角の大駒を弊履の如く切るところ、俊爽無類である。が、負けるとなると、一瀉千里バタ／＼と参つてしまふ。

が何と云つても、皆初段に二枚落以下である。金銀と云つた連中が、過半を占めてゐる。否、金銀以下であるかも知れない。此の目高の如き、文壇の將棋好に交じりて、井上八段の角落に向ひ得る幸田露伴氏は、正に巨鱗水を打つの概ありと云ふべきであらう。

將棋の勝敗は、各人の強弱に依ること勿論であるが、然しそればかりではない。非常に微妙な心理の影響もある。敵を怖れても行かず、侮つても行かない。その他、心に喜怒哀樂があつては駄目である。水の如く澄んだ心で、盤上駒無く盤前相手無きの境地に入らなければ駄目である。

技倆が秀れて居ながら、心理作用で負けた例は幾何でもある。寶曆六年の頃である。仙臺の人保原嘉茂左衛門と云ふ青年が、將棋の天才として、修業のために、江戸へ出て來た。

少年氣を負ふて、眼中名人上手なき概があつた。彼は、修業のために、幕府の將棋所伊藤家に入門を願つた。初ての手合に、彼の相手をしたのは、八段伊藤看壽であつた。鬼宗看の異名を取つた兄の九段宗看と、伯仲の腕があると云はれた名手である。保原は心中五段の實力があると確信して居た。然るに、愈々對局となると、看壽は、入門者に對する伊藤家の定法であると稱して、飛角を引いた上に兩香を落したのである。所謂四枚落である。心中五段の力あり（八段との對局なれば角落か香落である）と確信して居た保原は、心の裡で激怒した。せめて、二枚落（飛角を落す）なれば兎も角、四枚落とは何事ぞと思つた。いで、その儀ならば粉微塵にして呉れると、血眼になつて立ち向つた。が、焦つたのは彼の不覺であつた。看壽八段の應戦は、絶妙を極めて居た。それに反して焦りに焦つた彼は、平生の自信も、何處へやら、チリ／＼と攻め寄せられて、無残にも一敗地に塗れたのである。そのために、若き天才保原は慚愧憤悶の餘り、一生盤面に向はなかつたとの事である。が、看壽は四枚落で相手を破つたものゝ、相手の實力を認め、後に三段の免狀を送つたと

の事である。

その他、將棋界古今無双の名手と云はるゝ天野宗歩も、八段に出世すべき晴のお城將棋に、弱敵大橋宗珉に敗れて居るのである。天野宗歩は、名人にも香を引いて對し得たゝらうと云はれるほどで、十一段とも云ふべき神力を供へた名手であつたが、晴の場所につひ氣怯れがして平生の技倆が出なかつたと云はれて居る。

その他、慢心のために敗れた例もある。雁木流の元祖檜垣是安は、名人鬼宗看の右香落を破り、得意の餘り、凡そ天下に予に角落を勝つべき人はあらじと、豪語した。然るに超えて數日、同じ宗看の角落に向ひ、無残にも破れたゝめ、彼は憂憤の餘り、吐血して死んだと傳へられて居る。

將棋は、可なり氣持の問題であるから、自分より上手だと怯ぢてかゝる事と、手も足も出ない。それに反して、度胸よき下手は上手を實力以上苦しめ得るのである、名人小野五平若かりしとき、黒田清綱の邸へ伺候す。座に先客あり、清綱來客に曰く「此の老人は將

棋が強いから一局試みては如何」と、來客も興を催し五平翁とは知らず平手にて立ち向つた。然るに來客の鋒先鋭く、五平翁は四五段の人に對せし如く、苦辛して漸く勝ちたるに、清綱伯笑ひて曰く「おい榎本よく指したな。これは小野五平だよ」と。蓋し五稜廓の勇將は、將棋の達人と知らずして、その膽力に依つて、散々苦しめたのであつた。實力は、初段の遙か下であつたとの事である。

お  
せ  
つ  
か  
い

上

啓吉達が、そのカフェを、発見したのは、去年の九月頃だった。いや、啓吉達が、発見したと云ふよりもそのカフェが出来たのはと、云つても同じことだった。何故と云つて、啓吉達はそのカフェへ、初て行つたのは、そのカフェが出来てから、四五日目だったから。何でも二三人一緒だった。神楽坂への散歩の歸りに、ふと築土八幡の前の電車通から、二二間ばかりは入つた横町に、小さいカフェを発見した。

『Cafe Matsuba』と云つた、日本式の名前が、一寸氣に入つた。その上、内に煌々と燃えて居るガスの青い光で、晝のやうに明るい表が、りの様子が、可なり潇洒だった。青い紗のカーテンや、磨硝子の扉<sup>ドア</sup>や、内部の見えないやうに置かれた衝立やなどが、よく山の手

の一品料理やイカモノカフェに在るそのやうな、チャチなものではなかつた。その上、表が、り一面に作られて居る青い蔓草を、からませてある半間ばかりの高さの竹垣が、何とも云へない新鮮な、いゝ感じを店全體に與へて居た。

啓吉達は、何の躊躇もなく、ドヤ／＼と中へは入つた。表が、りの様子に現はれて居る、ある洗練されたる趣味は、中へは入つた啓吉達を、決して裏切らなかつた。店は、可なり狭かつた。小さい卓が、五つか六つか置かれて居るのに過ぎなかつた。が、その卓は眞新らしい純白な衣ドレスで掩はれ、その上にはその季節の美しい草花の鉢が置かれて居た。それを廻つて居る椅子や、店全體を照して居る裝飾電燈や、卓上の器物などにも、それ／＼に統一された趣味が現はれて居た。それよりも、彼等を欣ばしたのは、壁と天井だつた。それは、水色の紙で貼り詰められ、それに黒い枠がとつてあつた。

啓吉達は、冷たいコーヒーを、注文しながら、店の様子を玩味して居た。

壁にかゝつて居るスケッチ板の油繪を見付けると、友人の佐藤は立つて行つてその署名を見た。

『やあ。山岸莊助か、あんな連中が来るんだな。この店も、屹度あんな連中に頼んで、設計して貰つたんだな。なか／＼気が、利いて居る。が、俺だつたら、この黒い枠を、もつと太くするな。』

彼は自分の椅子に歸りながら、周囲の壁を見廻してそんなことを云つた。

『ねえ、君。此の店のお主婦さんの旦那は、美術家ぢやないかねえ。』岡野は、コーヒーを持つて來たウェイトレスに、さう云つて擲論かつた。彼は、もうその時、店の正面の酒場の所に、客が來たのを知つて、姿を現はして居た主婦を、ちらりと見て居たのである。

『どうで御座いますかしら。』

ウェイトレスは、軽く岡野の冗談を受け流した。そのウェイトレスは、少しも美しくはなかつた。又、向ふの隅の二人連の學生に、給仕して居る他のウェイトレスも、決して美しくはなかつた。が、主婦丈はあの正道を外づれた美しさを持つて居た。彼女は、三十に



近かつた。いや、それ以上かも知れなかつた。色白の瓜實顔で、身を持ち崩したと云つた容子が、身體中に現はれて居た。美しい妖婦味が、その通つた鼻筋や、色つほい眼付に隠出来なかつた。

『こんなシヤンなお主婦が居るのなら、毎日來てもいいな。』

佐藤は、主婦に聞えるほどの高い聲で、そんなことを云つた。

『どうぞ、いらつしつて下さい。まだ出來たばかりで、本當にお馴染の方と云つたら、ないんですから、ねえお主婦さん!』

ウエイトレスが、さう云ふと、主婦は啓吉達の方を見ながら、改めて挨拶した。

『ほんとうにどうぞ。』

そして、嫣然と笑つて見せた。

啓吉等は、給仕女のために、カフェ通ひをするやうな時代を過ぎて居た。美しい給仕女

を圍んで騒いで居る人達を見ると、啓吉はその若さが、羨ましかつた。啓吉等が、カフェに望んで居ることは、氣持よく、英語で云へばコムファアテーブルに、いろ／＼な點心を取ることが出來ると云ふことだつた。従つて、騒がしいカフェや、美しい給仕女に對して暗黙の求媚が、絶えず行はれて居るやうなカフェなどは、禁物だつた。茶なり菓子なりを快く給仕して貰ひ、それを落着いて味ふことが出來れば、満足するのだつた。

さう云ふ意味で、『Cafe Matsuba』は、啓吉等が発見した一の快い巢だつた。お主婦さんに興味を持つと云ふことは、啓吉等の冗談で、彼等は神樂坂の雑沓から、逃れて來て、此の小さいカフェで、軽い點心を取る宵が、月の中に三四回はあつた。

啓吉が、彼女を知つたのは、二度目か三度目かに、『Cafe Matsuba』へ行つたときだつた。その時、彼女は新しく來た給仕女として、啓吉等に紹介された。彼女は、孰ちらかと云へば、華美な顔だつた。豊頬と云つたやうなふつくらとした頬には、薄紅な血が、漲つ

て居た。黒目勝の眼が、オド／＼と、長い睫毛の下から、世の中を窺いて居ると云つたやうな感じだつた。一寸見には、淺草にでも居さうなオペラガールか、何かのやうな顔付であり、容子だつた。

が、二度三度と逢ふ度に、彼女がその扮装にも似合はず、純な心を持つて居ることが分つた。彼女は、最初の中は、自分の番でない限りは、嶋を負ふた虎のやうに、部屋の隅の卓に腰かけながら、ちつと此方を見て居るのだつた。周囲が、どんなに騒いでも、顔の筋肉一つ動かさなかつた。そして、自分の番であつても、黙々として愛想笑ひ一つしないで、料理やコーヒーなどを運んで居た。顔や容子こそ、都會的であつたが、初て上京して、しかもかうした生活に身を置いて居る田舎少女の、ぎこちなさが、彼女の動作の凡てに現はれて居た。

『純だね。ありや屹度、處女だよ。』

ある晩、一緒に行つて居た岡野は、啓吉にさう囁いた。啓吉も、それを信じて疑はなかつた。

『外に、何か商買がありさうなものだね。こんな所に居らや、汚漬ヌグイされるのに定まつて居るがね。』

啓吉は、白い前垂を、背後で蝶結びにして居る彼女の後姿を見ながら、さう云つた。かうした場所に、純な處女を置いて置く不安を感じずには居られなかつた。

さうした彼女が、急に啓吉達に、口を利き出したのは、それから間もなくのことだつた。他の給仕女ウェイトルスの一人は、彼女が口を利き出した動機をこんなに説明した。

『秀子さんは、こんな商賣が、嫌で／＼堪らないと云ふのでせう。が、お店へ來るとき、前借して居るから、直ぐには、廢せないものでせう。此間も、こんなことなら、一層死んだらいいなんて、滾して居るのでせう。だから、私云つてやつたのよ。そんなに、滾すよりも、死んだつもりで、働いたらどう。死んだつもりになつたら、お客に口を利くことだつて、平氣になるのでせう。又、お客から擲擲チヂれたつて、平氣で居られるでせう。かう云つ

てやつたのよ。そしたら、急に思ひ返して、そんなら明日から、死んだつもりで、お店で働きませう、役者が芝居をするやうな氣持で、お客に口を利きませうと、かう云ふのです。それから、急にあんなに口を利き出したのですよ。』

その説明の通り、秀子の口の利き方は、下手な役者が、臺辭を云つて居るやうに、いかにも切口上で、取つて付けたやうだつた。が、普通のかうした階級の女性には、とても見られないやうなぎごちない純真な言葉が、啓吉達を欣ばした。そして、彼女はお世辭か何かの積で、折々突拍子もないやうなことを云つた。彼女は、ある時、啓吉の手をしみじくと見て居たが、眞面目くさつて、

『まあ、あなたのお手は生蕃人の皮膚のやうな色をして居ますわね。』と、云つた。

それは、彼女の心持では、一つのお世辭であるには違なかつた。が、啓吉は挨拶が出来なくなつて、苦笑してしまつた。すると、彼女には、啓吉が何のために笑つたのか解らなかつたらしく、

『何をお笑ひになるのです。木村さんは、嫌な方ですわね。』と、云つて啓吉と、丁度その時一緒に居た佐藤とを、吹き出させてしまつた。

彼女のさうした物馴れない無邪氣さは、いろ／＼なことに現はれた。ある晩のこと、啓吉達が、紅茶を飲んで居ると、ドヤドヤと六七人連の連中が、連れ立つて押しかけて來た。それは、此の神樂坂附近のカフェやバアを、軒並みに渡り歩いて居る地廻りと云つた連中だつた。彼等は、一軒の店で、紅茶を一杯位宛飲んで、しかも一時間もそれ以上も、騒ぎ廻る連中だつた。給仕女ウエイテレスと巫山戯ムササビたり、彼女等を擲擲つたりすることが、彼等の第一の興味だつた。

その晩、その連中を給仕する番に當つたのは、秀子だつた。彼女が、さうした扱ひ難い連中を、六七人も一手で引き受けて居ることは、啓吉達には、一寸いた／＼しく感ぜられた。が、彼女は少しも怯びれずに、椅子を集めたり、卓子チャップルの位置を訂したりして、彼等の席を作つてやつた。そして注文した紅茶を順々に運んで居た。

『何うしても、處女ヴァージンですな。何うしても、處女ヴァージンに違ひないです。われ／＼は、それを信ずるのです。そして、それを尊重するのです。われ／＼は、秀子擁護協會を起したいのです。そして、彼女がいつまでも、處女性を保つことが出来るやうに後援してやりたいのです。』  
 彼等の内の長髪の青年が、立ち上つて、卓子テーブルを叩きながら叫んだ。その男を、啓吉は二度見たことがある。彼は、かうしたカフェ生活に、没頭して居る男だつた。そして、その機智と頓才とで、かうした連中の牛耳を取つて居る男だつた。

秀子は、濟した顔で、その男の前に、紅茶を運んで行つた。

『秀ちやん。握手しよう。僕は君の前へ來ると、いつも處女の匂を感じるのです。』

さう云ひながら、彼は滑稽な身振で、手を差し延べた。皆は、洪笑した。

啓吉は、彼等の惡巫山戯わらわらが、不快でないこともなかつた。が、彼等は彼等なりに、秀子の處女であることを認めて居ることが嬉しかつた。そして、それを擁護しようと思ふ心持を、冗談にしろ持つて居ることが、嬉しかつた。

最初、彼等がは入つて來たときから、氣が付いて居たことだつたが、彼等の中には、印度人が一人交じつて居た。此の印度人も、啓吉は一二度見かけたことがあつた。日本語を巧みに喋べつた。そして、何時もかうした連中と一緒に姿を見せて居た。完全に近い日本語で、喋べり散らかすのがキザだつたし、態度が生意氣だつたので、啓吉は好きでなかつた。

秀子が、長髪の男と握手したのを見ると、此印度人も、手を差し延べた。

『貴女、私とも握手して下さい。』

さう云はれると、秀子は差し延べて居た相手の手を、ちつと見詰めて居たが、

『まあ、イヤな方！手に墨をお付けになつたりなんかして。』

秀子の突拍子もない答に、皆は笑つた。印度人は可なり、面喰つた。

『いゝえ、違ひます。墨なんか塗つて居ません。』

道に僞舌な彼も、少からずタヂ／＼として居るらしかつた。

『まあ、嘘おつしやい！墨を塗つて居なければ、こんなに黒いことがあるものですか。』

秀子は、大真面目だった。

印度人は、可なり悄氣て居た。彼は、それを辯解するために、あまり云ひたくもないことを、云はずには居られなかつた。

『私印度人です。色黒いです。』

が、秀子はなかくそれを承認しなかつた。

『まあ、あんな嘘を。そんなに、日本語のお上手な印度人があるものですか。まあ、ひどい嘘をおつしやる！』

さう云つて、秀子はいつも頑ばつて居た。そして、印度人の手足の黒いことを、墨を塗つたことにしてしまつた。キザな印度人は、妙にテレてしまつた。

それを見て居た啓吉達は、可なり愉快だった。

『秀子の奴、あんなことを真面目で云つて居るのかしら、』

佐藤は、半信半疑のやうに啓吉に云つた。

『だつて、あの様子ぢやひやかして居るとも見えないぢやないか。大真面目ぢやないか。』

啓吉は、心の裡でもさう思はずに居られなかつた。さうだとすると、『愉快な奴だね。あの印度人の奴、スツカリ悄氣てしまつたぢやないか。』

佐藤は、可なり面白がつた。啓吉も虫の好かない印度人が、皮肉な喧嘩にもならない方法で、やり込められたのが、可なり愉快だった。

その連中が、去つてしまふと、秀子は啓吉達の卓に來た。そして、訴へるやうに云つた。

『まあ、あの方イヤな方ですわね。手足に墨なんか塗つていらつしやるのですもの。』

啓吉達は、腹を抱へて笑つた。

『馬鹿だな君は！ あれは、印度人ぢやないか、悪いねあんなにひやかして。』と、佐藤が云つた。

秀子は、一寸顔を赤くした。

『まあさうですか。あんなに日本語がお上手でも印度人なんですか。』

彼女は、可なり悄氣て居た。

その時から、啓吉達は、彼女の無邪氣さに、少しの技巧もないことを知った。

彼女が、ほんとうに處女で、田舎少女らしい無邪氣さとを、持つて居ることを知つてから、啓吉は彼女と話をすることが一つの楽しみだつた。彼女も亦、啓吉に普通の客に對する以上の親しみをを見せて居た。むろん、啓吉は彼女に對して、色情的な感じは少しもなかつた。少くとも、自分の意識して居る範囲内では感じなかつた。が、若い女性と、ある親しみを以て、話をすることに、ある種の温い欣びを感じることは事實だつた。殊に、人好きのしない啓吉にとつては彼女は東京の凡てのカフェの給仕女ウエイトレスの中で、啓吉に親しみを持つて居る唯一の女だつた。彼女は、よく煙草の火を付けて呉れた。煙草の火を付けることは、彼女が最近覺えたお客に對する唯一の技巧だつた。彼女は客の誰でもが煙草の袋を出すと、それが一大事であるかのやうに、マッチを持つて來て、火を付けて呉れるのだつた。

彼女から、煙草に火を付けて貰ふ度数が、重ること、啓吉も彼女の故郷が、越後であることや、彼女が客から貰つた金の一部を、國元へ送金して居ることなどを知つた。そして、彼女の身の上に關心するやうになつて居た。

が、もし次のやうな事件が、起らなかつたならば、彼女と啓吉とは普通の客と給仕女ウエイトレスとの一寸した馴染として、そのまゝに終つたに違なからう。

その事件と云ふのは、十二月の終に近いある夜の事だつた。啓吉は、岡野と一緒に日が暮れて、間もなく、『Cafe Matsuba』に行つた。が、その夜に限つて、いつも居る秀子の姿が見えなかつた。啓吉が、軽い失望を見せると、ウエイトレスの一人が云つた。

『木村さん！今日秀ちゃんは、留守よ。』

『さうかい。何處へ行つたの。』

『あの、中野のお友達の家へ行つたのです。それに秀ちゃんは、明日か明後日か國へ歸るんですつて！』

『えゝ！ほんとう。』

それは啓吉に取つて、軽いショックだった。

『え、今日なんかそれで買物をするために、中野のお友達と一緒に、方々へ行つたのです。』

それは、もう紛ぎれもない事實だった。

『さうかい。でも、歸るなんて云ふことは、噫にも出さなかつたぢやないか。』

『私達にだつて、さうですわ。昨日から急に歸ると云ひ出したのですもの。』

その給仕女の云つて居ることに、嘘はなさうだつた。彼女が、東京に居なくなる。それは、啓吉にとつて、一寸淋しいことだつた。それは、啓吉が有する唯一人の親しい給仕女を——いや、若い女性をと云ひ直してもいいが——東京から失ふことだつた。

『さうかい。もう逢はれないかしら。』

啓吉は、普通の客であることを忘れて、つひそんなことを云つてしまつた。

『さうですね。もう、お店には出ないでせうけれども、十時頃にいらつしやれば、御挨拶

する丈はするでせう。』

と、その給仕女は云つた。

啓吉は、彼女が國へ歸ることが、止むを得ないことにしても、もう一度丈は會つて、別れの言葉を告げたかつた。その上に、啓吉は彼女に對して軽い負債を持つて居た。それはその月の初に、啓吉が京都へ用事があつて旅行をしたとき、啓吉は半分冗談に、何か土産を買つて來てやるやうなことを、秀子に約束した。が、忙しい紛ぎれに、と云ふよりも最初から實行する意志も、強くはなかつたのであるが、とにかくその冗談半分の約束を、違約して居た。

彼女が、國へ歸ればもう永久に逢はれないかも知れないと思ふと、その軽い違約が、妙に氣になり出して居た。彼は、彼女が歸國する以上、何か一寸した品物を贈つて、それで違約の責を逃れると共に、饒別の印にしたいと思つた。

彼は、岡野と一緒に「Caro Matsuba」を出ると、神樂坂の通を散歩してから、中町の下

宿に居る友達を尋ねて、時間を潰してから、再び『Matsuba』へ歸つて行つた。その道で、秀子に贈るべく一かけの半襟を買ひ求めた。女に贈る贈物としては、それより外のものは、一寸思ひ付かなかつた。

『Matsuba』の前まで来たときは、丁度十時半頃だつた。

啓吉達が、扉ドに手をかけようとしたとき、岡野が立ち止まつて、啓吉に聲をかけた。

『おい見ろ——、あれは秀子ぢやないか。』

さう云つて、彼は横町の奥の方を、さし示した。いかにも、四五間先の街路に、立ち止まつて、此方に向いて居る女性は、秀子に違なかつた。

『うん、秀子だ。』

さう云ひながら、啓吉は四五歩奥の方へ進んだ。すると、不思議にも秀子らしい女性はバタバタと一二間、早足に駆け出した。

『おや！秀子ならば逃げる譯はない。』

さう思つて、啓吉は足を止めた。すると、秀子らしい女性も、又足を止めた。そして、手を差し延べて、啓吉の方を招くやうにした。

『おや！招んで居るのぢやないか。』

啓吉達が、又二三歩進むと、女は又四五歩走しつた。

『何か使ひに行くから、店で待つて居ると云ふのぢやないかね。』

さう云へば、啓吉にもそんな氣がした。そのときに、ふとその秀子らしい女性と、並んで歩いて居る男性の姿が目についた。

『連があるやうぢやないか。』

岡野がさう云つた。さう云つた言葉が、追はうとする啓吉の心を鈍らした。そして、もし彼女が秀子であつたならば、啓吉等の姿を見た筈だつたから、店で待つて居たら、直ぐ歸つて来るだらうと思つた。さう思つて、啓吉達は店の中へは入つた。

啓吉達が、卓子オシヅメに向つて腰を下すと、先刻の給仕女ウエイレスが、不精無精に啓吉の方へ近づいて



来た。

『まだ歸つて居ない？』

『どうしたのか、まだ歸つて來ないのです。』

彼女の返事は、氣のない返事だった。

『さうかね。今茲の前で、秀ちやんのやうな女を見かけたのだがね。』

『いえ。そんなことはない筈です。』それに今晚は歸つて來ないかも知れません。

『さうかね。』

啓吉は、彼女の空々しい無愛想さが不愉快だったので、口を噤んだ。

『ぢや、兎に角紅茶を持つて來るさ。』

岡野が、さう云つてその場を繕つて呉れた。

『彼女は、屹度嫉いて居るのだよ。僕等があまり秀子、秀子つて騒ぐから。』

給仕女ウエイトルスが、注文ウエイトレスを通しに行つた後で、岡野がさう云つて啓吉に囁いた。啓吉は、だんく

不愉快になつて居た。何かを包み隠すやうな態度が、給仕女ウエイトルスにあるのが不快だった。それと共に、自分が秀子に會ひたがつて、やきもきして居るやうに、思はれて居さうなのが、不快だった。

『この様子ぢや、屹度合はせないつもりかも知れないぜ。今晚は歸つて來ないなんて、先刻とは云ひ草が違つて居るぢやないか。』

『さうだね。』

啓吉も、嫌々ながら、それを承認せずには居られなかつた。

『ぢや歸らうか。』

啓吉は、止まつて居るのが不愉快だった。そのときに、啓吉達よりも、先に出て行く一人の男が居た。その男は、啓吉がこのカフェで、見かける男性の中で、一番嫌な男だった。彼は、四十二三の大柄な體格の立派な男だった。顔の輪廓も、キツバリと整つて居た。それで居て、顔全體に默的な卑しさが、充ち満ちて居た。男子の醜い性慾その物を象徴したや

うな男だつた。此の男の顔を見る丈で、啓吉は不快になつた。その上、彼は華族と云つてもよいやうな衣服を着て居た。最初、啓吉は此の男が、此のカフェの主婦と馴々しく話をして居るのを見て、彼が主婦の旦那ではないかと疑つて居た。が、それがさうでないことは、直ぐ判つたが、お主婦とは可なり親しい間柄らしかつた。

その夜の彼は、何物かに憤慨して居るらしく、給仕女ウエイトレスを亂暴に、二三度抓つた後、荒々しく扉ドヤを排して出て行つた。

啓吉は、その男が憤慨して居るのも、やつぱり秀子に合はれない爲ではあるまいかと思ふと、啓吉は益々不愉快になつて來た。お主婦とその男と秀子との間に、ある暗い影が横はつて居るやうに臍ろに感ぜられた。

出て來るとき、彼は秀子に對する贈物を、彼の給仕女ウエイトレスに托するのが嫌だつた。が、さうするより外には、秀子に——むろん彼女の故郷の宿所などは知らなかつた——彼の心を通ずる法はなかつた。

啓吉は、自分の宿所の刷つてある一葉の名刺を、半襟の箱に入れてから、それを饒別の印に秀子に渡して呉れるやうに頼んでから、不快な心持をいだきながら、岡野と連立つて『Cafe Matsuba』を出た。

が、そのカフェへ出たのちも、先刻カフェの前の横町で見かけた女性が、どうも秀子であるやうに思はれて仕方がなかつた。彼女が手招きしたのは、店では合へないから、此方へ來て呉れと云ふ合圖であつたのかも知れないと思つた。店の者、或はあの四十男に、姿を見られるのを恐れて、逃げながら、啓吉を呼んだのかも知れぬと思つた。さう思ふと、啓吉はその招きを容れて追はなかつたことが、烈しく後悔された。追つて行つたならば、縦令之れが彼女でなかつたにしろ、かうした心残りはずに濟んで居る。が、一方啓吉はかうも考へた。それが、彼女であるかないか分らないで、此の儘永久に（彼女が國へ歸る以上恐らくは、再び上京しないだらう）別れてしまふ方が、何れほどロマンチックであるか分らない。彼女に對する淡い思慕の情は、あゝした戯曲的な一寸神祕的な結末を得て、

終始一貫するのだ。彼の女性が秀子であつたかどうかは、永久に判らない方が彼の女性を追かけて、それが秀子でないことが分つたり、またそれが秀子であつて、月並な別れの挨拶をしたりするよりも、どれほど上品でどれほどロマンチックであるか分らないと思つた。が、さう思ひ返して見るものゝ一縷の心残りもは續いて居たが。

365.00  
107500

が、幸か不幸か、それは一つの神祕ロマンとしては残らなかつた。その出来事があつてから、五六日目に、彼は五六日に思ひがけなく（むろんハガキ位寄越すかも知れぬ當はあつたが）、秀子の手紙に接した。

それは啓吉を駭すに足るほどの内容を持つて居た。

『亂筆にてお許し下さいませ。』

名残惜しい彼の東京を後にしてなつかしい皆の許に歸りました。彼の夜計らず、お目に掛りながらも、事情のためお話が出来ず、あのまゝ永のお別れとなりました、あの時幾

度もお手招きしましたのですが——あれ切り私の好きな貴方様ともお話しすることが出来ないで、お互に別れることゝなりました。薄いカーテン一枚置いて見れば私を可愛がつて下すつたなつかしい貴方様のお姿も見えて居りながら、お話しすることの出来なかつたのを、どんなに口惜しく思つたでせう。堪忍して下さいませ。皆自然の成行です。これで永久のお別れと知つたら、誰人も構はずに飛んで行き、お別れの握手をと思ひし胸を堪へ床に入つて泣きました。』

其處には、むろん女性に特有なユケツツシユな誇張があつた。が、たゞ普通の客として、卓を隔て、語つたに過ぎない秀子の自分に對する信頼が、思の外に大きかつたのを知ると、啓吉は決して悪い氣持はしなかつた。それよりも、彼の夜の女性が、やつぱり秀子であつたのだと思ふと、後を追はなかつた残り惜しさが、ヒシ／＼と胸に湧いて來た。手紙は續いて居た。

『在京中は一方ならぬお世話になりました、心から感謝いたします。又お別れのとときに下

さつた品は有難う頂きました。東京を離れるときは、心から悲しう御座いました。が、汽車に苦しめられる爲に、悲しい心も幾分か紛ぎれましたが、もう一時間で越後へ着くと思つたときの嬉しさお察し下さいませ。やはり私には我家ほど嬉しいところはありません。老いたる父も病める弟も、私の歸りを喜んで待つて下さいました。

が、木村様、私の今度急に故郷へ歸りましたことに就いては深い悲しい事情が御座るます。私の本當の心を誰も御存じないでせう。お店に居て、多くの男性に近づいて居る危険な私の身をも御存じないでせう。又今迄の成行をも無論です。

歸郷は死を覺悟して居ります。二度と恐しい東京の地を踏みません。私は本當に不幸な者です。

凡て一時の夢でした。

木村様、お願いです。夢の一生を小説に書いて下さいませんか。幾分の入は消えて行く私に同情して下さいませることが出来るかと思ひます。

お返事必ず下さいませ、お待ちして直ぐ筆を取ります。

お寒さの折柄御自愛遊ばしませ。

秀子

なつかしい

木村様

それは、約して見れば、近日の裡に自殺をするから、自身の身の上を、小説に書いて呉れと云ふ手紙だつた。

自殺をすると云ふ意を、ほのめかせた言葉の裡には、女性に特有な感傷的な誇張があることは、啓吉も氣が付かないではなかつたが、然しさうした意味を手紙の裡で明に告げられた啓吉は、ある程度まで本氣にならずには居られなかつた。それが、女性に特有な誇張ばかりだと濟して居られなかつた。あの無邪氣な、世間知らずの秀子は、どんなことでも、やり兼ねないと思つた。殊に、かうした手紙を買つた以上、啓吉としては、よしそれな

ら小説に書いてやらうと、濟して居る譯には行かなかつた。その上、出来ることなら自分の力で、此の可憐な少女を、救つてやりたいと云ふ純な心持が、勃勃として動いて居たことも事實である。

彼は、筆を取つて、直ぐ彼女に返事を出した。それが、かなりの感激を以て書かれたことも事實だつた。彼は決して、さうした短慮なことをするなと云つた、そして、もし彼の出来ることならば、どんな相談にでも乗つてやるから、事情を残りなく知らして欲しいと書いた。

返事は、五日ばかりして來た。

『嬉しいお玉章只今拜見いたしました。本當に助けられたやうに、どんなに嬉しかつたか分りません。貴方様の御親切を、今知つたのでは御座るませんが、尙有難さを感じました。』

木村様、何から申上げていゝか分りませんが、お言葉に甘えて凡てを申上げますから、

お聞き下さいませ。

私が急に歸國しましたのは、本當に口惜しい死んでも取返す事の出来ない身になつたからです。木村様、貴君のお手紙に私を純潔な少女とお書きになつてありましたので、斷腸の思が致し、少し静まりかけた心が又動搖して参りました。私は弱い女性でした。今までは、男性に對して心をこそ與へたことがありますが、身體丈は誰人に對しても云ひ切ることの出来る強い自信がありました。ところが、歸郷する前の夜、私はある人に騙されて自動車に乗せられ——力のない私は其の人から、大きい男子の力に、向ふ私の力は勝つことが出来ません、腕力のために——あゝ思ひ出しても、悲しくなります。私は直ぐ死を覺悟しました。が、それにも拘はらず、その呪はしい人が小遣ひとして置いたお金を取りました。何故！私は毎月國許の方へ送金して居ますので、手許には一文もないのです、死ぬにしても一旦國へ歸つてからと思ふと旅費とどうしてもお金が入るのです。私はお金を手にすると、その翌くる日直ぐ歸ることを決心しました。家の者には

會社が休みで一寸見舞に歸りましたから、五日までしか居られませんと、皆をあざむいて居るのです。あゝ五日、私はその五日に何うすればいいのでせう。私は國へ歸らずに、なぜあのまゝ覺悟しなかつたかと思ひます。が、家には——父は長年に床ばかりです。弟は重病に苦しんで居ます、入院させましたが、いつまで置いても同じなので、退院させました。私達の手では入院の費用などは、とても續きません。諦めて家で養生させて居ます。藥代と小遣は、私が一人で送金して居ました。送金の出来なかつたとき——私が着物を買つたりして——弟は藥を止して居たさうです。』

その後、彼女は、家庭の事情を細々と述べてあつた。義兄があるが、それが一家に對して何等の補助をしないこと、自分と自分の年若き兄とが、働いて辛うじて、病んで居る父と弟とを養つて居る有様を述べてあつた。

『私は歸つて、家の容子を見て何も云はずに泣きました。餘りに情けなさに泣かすには居られませんでした。今私が居なくなつたら、弟は何うなるか、今でも何うかと心配して居るものが、今のまゝでも何うかと思つてゐるのが、今私が送金しなくなれば助からないのは定まつて居ると思へば、私の覺悟もゆるんで參ります。私は弟を助けてやりたう御座います。私は働くに生くるのに道がないのです。が、折角弟が私を力に養生して居る者を、私が死んだ上、弟もかと思ふと、苦しい胸は——木村様お察し下さいませ。親や弟に安心させてもあるものを何うして。幾等泣いても泣き盡くせません。上京しても二度と、カフェには入いられません。入れば必ず、あの人に見付けられます。あの方は、私の歸國を知つて居ます。彼の夜、彼の方はカフェに来て居たので、そして私の外出しての歸りを待つて居たのです。貴方様が、行らしたとき、私が手招きしながら逃げたのは、あの方が店に居たからです。その爲に、店には到頭出ず、お別れの挨拶も出来ず、彼の夜は忍び泣きに泣きました。私の今までの事情お分りになつたでせう。國にも居られません、あの方が來たら、何うすることも出来ませんから。早く家を出なければなり

ません。彼の人、私が十日頃まで家に居ると思ふて居ます、私は五日まで居ませうが、先は何うしてよいかと考へると分らなくなります。

今しばらく、汚れた身を、弟の爲めに犠牲にしてやりたいとは思ひますが、カフェへは行けません。あのカフェではなくとも、何處のカフェへも行けません。だと云つて、事務員になつたのでは、自分一人の身を支へて行くのもどうかと思ひます。

今はある決心をして居ますが、身を賣るやうなことはしませんから、御安心下さい。槍持つ家に生れて来て、親の赤面するやうなことは決していたしません。自分の腕を取るのであります。いやしく身を持ち崩しは致しません。捨てし身で耻は知つて居ますから、御安心下さい。まだ書きたいこともありますが、餘り長くなりますから、是でよします。御返事は頂きましても、取る道は外にないと思ひます。五日までは家に居ります。縦令、東京へ行つても、お目にかゝりません。悪しからず、お許し下さいませ。面目なくてお逢ひ申すことも出来ませんから、悪しからず、幾重にもお詫び申し上げます。

これにて、失禮いたします。上京しても、どなたにも、お目にかゝりません。是にて失禮いたします。幸福にお年をお迎へ遊ばしませ。

秀子

なつかしい

木村様 おもとに

此の手紙が、啓吉の心に、可なり大きい動搖を與へたことは事實だつた。

あの夜の一寸した神祕ロマンはすつかり、解かれてしまつた。あの熟ちらかと云へば、なつかしい、ゆかしい出来事の裏には、啓吉がほのかに豫想したやうな淺ましい現實が、マヅくと横はつて居た。

何より啓吉の心の内に、猛然として湧いたものは、怒であつた。啓吉が、豫感した通り、果して耻知らずの、色魔であつたかの四十男に對する怒であつた。怒と云ふよりも義憤だ

つた。啓吉は、もう自分の體力が、それに堪へるならば、見付け次第殴り倒してやりたいと思つた。

## 下

それと同時に、彼は秀子の境遇に深い同情を注がずには居られなかつた。都會馴れない田舎の少女が、父と弟とのために、働くつもりで上京する。二十位の少女が、田舎へ送金し得る程度の金を得るためにはカフェへは入るより外には、手段がなかつたであらう。

そして、月々心掛よく送金して居る。それなのに、女性に對して耻知らずの男が、無邪氣な彼女を、騙して連れ出して、暴力で以つて、その處女性を蹂躪してしまふ。そのために、彼女は死を決心して田舎へ歸つて居る。男は、帖然として一人の處女を弄んだことの誇を感じて居る。そんなことを考へて居ると彼は、堪らなく腹が立つた。そんな罪惡が罰を受けずして、濟まされることが、どうにも腹立しかつた。彼は、秀子が、その男に犯さ

れながら、死に歸る旅費として、その男から金を貰つたことを考へると、心が暗くなつた。

啓吉は、彼女に出来る丈のことをしてやらねばならぬと思つた。それが、彼女の事情を知つた自分の當然の義務だと思つた。

彼は直ぐ、彼女に返事を出した、そして、彼女が縱令處女性を失くしたと云つても、それが彼女の意志でなくして、他からの不可抗的な侵害である以上、そんなに耻ぢるには當らないと云ふこと、また何もその男を、恐がる必要はないこと、もしその男が執擁に、彼女に付きまとふならば、警察の力を借りてもいゝことなどを精しくかいてやつた。そして、死ぬと云つたやうな馬鹿なことを考へないで、もう一度上京して、適當な職業を見付けてはどうか。自分が責任を以て、安全な職業を探してやつてもいゝ。もし上京するのがどうしても嫌ならば、大阪あたりで職業を探してやつてもいゝ。彼は、そんな風にかいた上に、旅費として金參拾圓送つてやつた。



折返して、彼女からお言葉に甘へて、上京すると云ふ返事があつた。

彼女が上京したのは、年が明けた正月の十日頃だつた。彼女は、啓吉の家を訪ねるのがどうしても耻しかつたのだらう。乗つて居た車を、啓吉の家へ導く坂の下へ止めて、車夫を使ひに寄越した。車夫は、取次に出た女中に、

『吉岡秀子と云ふ方に言傳を頼まりました。今日東京へ参りましたが、いづれ宿が定まつてから御挨拶に出ます。どうぞ旦那さまによろしくとのことでした。』

車夫は、口早にさう云ひながら、コソ／＼と逃げ去らうとした。玄關の次ぎの間に居た啓吉は、それを聞くと、玄關へ出て車夫を呼び止めた。呼び止められた車夫は、不精無精に啓吉を、坂の下へ案内した。其處にあつた幌を下した車の中から、やゝ狼狽した秀子が姿を現したのである。

『何うして僕の家へ来ないのです。』

『あのあんまり失禮で御座いますから。』

『知己の家で宿るところがあるのですか。』

『でも。』

『なければ職業の見付かるまで僕の家へ宿まればいゝぢやありませんか。』

『でも、奥さまにお目にかゝるのが、きまりが悪う御座いますわ。』

『なに、そんなことがあるものですか。家内には貴女の身の上をよく話して置きましたから、決して氣兼ね入らないのです。』

さう云つて、啓吉は到頭秀子を自分の家へ連れて來た。

啓吉の妻は、秀子の來たことを、心からは歓迎して居なかつた。田舎の嚴格な家庭に育つた彼女は、給仕女ウエイトレスと云つたやうな階級の女性を、一種賤しいもの恐いものとさへ思つて居た。それはなか／＼動しがたい先入感だつた。

啓吉は、秀子のために、妻にさうした偏見を捨てさせようとした。

『給仕女ウエイトレスをして居たからと云つて、秀子はすれからしの女ぢや、決してないんだ。今に直

へ判るだらうが、無邪氣で純な女なんだ。今に秀子がどんな女かと云ふことが判るだらう。』  
 が、妻はなかく、啓吉の意見には賛同して呉れなかつた。

『でも顔や、容子などは、いかにもオペラ女優丸出しと云つたやうなものですもの。わたし何だか恐いわ』

妻は、陰でそんなことを云つて居た。が、啓吉は、今に秀子の無邪氣なところが、妻にも分つて呉れるだらうと思つて居た。が、啓吉の期待は裏切られた。彼女は、もう無邪氣ではなくなつて居た。啓吉の家へ来てからは、ヘンに堅くるしくなつて居た。そして、いろ／＼なことに氣兼ねして、慎しみ深く振舞つて居た。カフェに居た頃のやうな、天真さ無邪氣さは少しも残つて居なかつた。妻が、彼女を意識の裡に、こだはらせて居るのも無理ではなかつた。が、それでも他へ出さねばならぬ縫物があつたので、秀子の口が見付かるまで、その仕事彼女に割當てられて居た。

啓吉は、最初は彼女のために、どんな盡力でもしてやるやうな氣持だつた。彼女が、東京を去る前夜に起つた小さい奇遇や、郷里から来た手紙などで、啓吉の心は、可なり興奮して居たのであつた。が、彼女が彼の云ふ通に、自分の家へ来てしまふと、妙に氣抜けがしたように、よい口を探してやらうと思ひながらも、その儘になつて居た。殊に、ヘンに堅くるしく慎しみ深く振舞つて居る彼女は、もう啓吉に取つては、多くの興味を與へなかつた。五日と十日と經つに連れて、啓吉は狭い家に同居しながら、秀子とロクに口さへ利かないことがあつた。

最初は、啓吉と秀子との間に對して、あはい嫉妬を持つて居たらしい妻は、スツカリ安心すると同時に、慊れたやうに云つた。

『まあ、お父ちゃんも秀子さんの来るまではあんなに賞めて置きながら、此の頃なんか對手にもしないやうにするのですもの。わたしが中に立つて困まるわ。』

そんな不平を滾しながら、妻はやつぱり女同志で、秀子の面倒を見てやつて居た。自分には華美すぎる衣類を、一二枚秀子に與へたりした。

秀子が無邪氣でなくなつたと同時に、今度はその反對であることが、だん／＼判つて來た。啓吉は彼女に就いて、少しづつ幻滅を受け始めた。

女中のまつが、いろ／＼なことを告口し、妻がそれを啓吉に傳へた。

『秀子さんは、此間まつに妹があるかつて訊くんですつて。まつは、ありませんと答へて、なぜそんなことを訊くのと秀子さんに訊いたら、今度家を一軒持つかも知れないので、女中が欲しいのですつて。』

それを、秀子に好意に解釋してやれば無邪氣な虚榮から、そんな嘘を云ふのだと思はれないでもなかつたが、他人の家に厄介になりながら、そんなことが云へると思ふと啓吉は、一寸イヤな氣がした。

『お父ちやんなんか、一生懸命になつて秀子さんのことを心配してあけても、向ふちやのん、きなのですもの。』

妻は、啓吉にひやかすやうに云つた。

秀子が來てから、十二三日經つた頃だらう。啓吉が夜外出から歸つて來ると、十時近いのに秀子は居なかつた。妻は啓吉の顔を見ると、

『秀子さんは奉公する所が定まつたんですつて。』

『定まつた！ 定まつたて！ 自分で見付けたのか。』

啓吉は可なり意外に思ひながら訊き返した。

『え、何か新聞に廣告が出て居るので行つたのですつて。』

啓吉は、秀子が自分に無斷で奉公口を見付けたことが、氣に入らなかつた。

『おれが、確かな安全な口を見付けるまで待てと云つて居たのが分らないのだね。』

『だから、私も秀子さんにさう云つたのよ。一度主人に相談して下さいよと云つたのですけれど、聽かないのですもの。』

『そして向ふの家はどうだい。』

『妾には云はないのよ。でも、まつの話に依ると中野かどこかに居る西洋人の家ですつて、

しかも三十位の獨身の獨逸人。』

『うむ、そんな家へ一人で行くの？』

啓吉は、裏切られたやうな淡い怒を感じた。

その夜、秀子が歸つたとき、啓吉は穩かでない心を懐きながら彼女と差し向つた。

『僕が安全な、いゝ口を探して上げると云つたのが、あなたには分らないのですか。』

彼女は、下を向いたまゝ黙つて居た。

『一體先方は何と云ふ家です。確かな安心の出来る家ですか。』

秀子はまだ黙つて居た。

『無論、僕はあなたの自由を束縛しようと思ふのではない。が、僕は一旦貴女を世話しようと思つた以上、僕は貴女に對してある責任を感じるのです。僕が世話しようと思つた以上、僕はあなたが二度と危険な場所へ身を入れるのを黙つて見ては居られないのです。貴女は、最初自分一人で奉公口を見付けたため、取返し付かない事が出来たのでせう。何

もさう急ぐことはないのだから、僕の家に来て、僕が探して上げるまで待つて居てもいゝぢやありませんか。きけば、先方は一人身の西洋人と云ふぢやありませんか。そんな家へ云つて危険ぢやないのですか。』

彼女は暫らく黙つて居た後に、

『私他人さまから、どんな誤解を受けてもいゝと思つて居るのです。』と、云つた。

『が、そんな誤解を受けるやうな家に行く必要が何處にあるのです。給金の高い所が、希望ならそのつもりで探して上げますから、その口は斷つたら、どうです。斷れないことはないのでせう。斷つて、おしまひなさい。僕は不賛成です。』

啓吉は、秀子がその口を思ひ止まつたと、信じて居た。が、その翌日啓吉が、午後から外出して夜遅く歸つて來ると、秀子の姿は見えなかつた。彼女の部屋に當てゝ居た三疊の部屋には、彼女の小さい行李も手筈も見えなかつた。啓吉の顔を見ると、妻は興奮しながら云つた。